

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2024
graph magazine vol. 63

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

vol. 63 定価100円（税込み）


Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる
主は、生きておられる
Unser HERR lebt

メッセージ

4 イエスの救い（12） ご奉仕のための備え　ゴットホルド・ベック

23 雪よりも白く　山下 彰

6人の証し

32 神のなさることは、すべて時にかなって美しい　井上 公子

40 主はすべてのことを最善へと導いてくださる　今橋 達男

48 主は、私の光、私の救い　近藤 南海子

56 いのちなるキリスト　小久保 智子

66 あなたが私とともにおられますから　増田 司

76 イエス様が愛し導いてくださる　古田 桐子

メッセージ

84 今の時の苦しみ　ゴットホルド・ベック

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

ゴットホルド・ベック

二タラントの者も来て言った。「ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。」その主人は彼に言った。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」（マタイ　25・22、23）

その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。」しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」（マタイ　7・22、23）

今回は、奉仕のための備えについてごいっしょに学んでみたいと思います。「神に仕える」と言いながら、実は目的を自分自身の成功におき、この世的な方法をもって神に仕える者がいる、ということは重大な事実です。最初に記した聖書箇所を見ると、主イエス様の御名によって病を癒し、悪霊を追い出した人々に対して、イエス様は「よい忠実なしもべだ、よくやった。」とはおっしゃらずに、「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」と、おっしゃっています。主イエス様にとって大切なのは、私たちがどれだけ多く何をするかということではなく、どのような動機で、どのような力でご奉仕をするかということです。

「ゼロ」という数をご存じでしょう。寒暖計を見ると、「0」はプラスとマイナスを分けています。聖書の中で言う「0」は十字架です。十字架は、神に仕える者のご奉仕が一時的なものか、または永遠に続くものかを決めます。

神のしもべが十字架を自分ものとして体験していればいるほど、そのご奉仕は永遠に残る実を結ぶものとなるはずです。ですから奉仕者にとって大切なのは、どれだけ十字架を体験しているかであり、また十字架に対するその人の心の態度なのです。

主イエス様の十字架の死は、私たちにとって何を意味しているのでしょうか。十字架は、罪と咎（とが）の赦（ゆる）し、私たちの当然受けなければならない刑罰をイエス様が身代わりに受けてくださった、私たちに対する裁きの赦しを意味しています。

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

それだけではなく、ローマ人への手紙6章は、罪の力が打ち砕かれ、私たちの古い人がイエス様とともに十字架につけられたことを教えています。この事実を見た時、私たちは主にすべてをゆだね、明け渡し、主に仕えていこうという決心をしました。しかし、そのように決心して主に仕えていくうちに、それらのすべては、自らの能力、自らの努力ではできないというローマ人への手紙7章の体験にぶつかります。この7章を通して教えられるのは、自分の力で主に仕えることはできないという事実です。主である神が自ら、すなわち聖霊様が私たちの内に、また私たちを通してお働きになるのでなければ、そのご奉仕は虚（むな）しいということです。

しかし、ここまでの全部を体験したとしても、主に仕えるご奉仕の準備がすべて整ったとはまだ言えません。

さらに奉仕への備えとして大切な三つのことについてご一緒に考えてみたいと思います。第一に「たましいの中の戦い」、第二に「理想的な学校」、第三に「奉仕

の秘密」についてです。

1. たましいの中の戦い

まず第一に、ご奉仕の備えとしてさらに必要なことは、たましいの中に戦いを感じなければならないということです。たましいの中の戦いとは何でしょうか。

主イエス様でさえ、たましいの戦いをお感じになりました。主はいつも、父の御心をなそうと願っておられ、また事実として御心をなさいました。主イエス様自身、ご自分の意志を持っておられましたが、その上に自分を立てるということなく、いつも「わたしの心ではなく、あなたの御心をなさせて下さい」という心の態度をもって、地上の生涯を全うされました。

主イエス様が荒野でサタンに試みられた時、サタンはイエス様をいわゆる殺人や姦淫などの大きな罪にいざなったわけではありませんでした。イエス様に父の御心とは関係なしに自分勝手に何かをやらせようと、イエス様を試みたのでした。しかし、イエス様ご自身は次のように言っておられます。

> 子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。
>
> （ヨハネ　5・19）

これこそが、イエス様の実り多いご奉仕の秘訣でした。「わたしは自分からは何事もすることができない」、これがイエス様の決意だったのです。

このイエス様の決意を私たちが頭で知り、同じように行なおうと思うだけでは十分ではありません。主が私たちの弱い点に、一つ一つその御手で触れて下さり、「これはあなた自身から出たものであり、わたしから出たものではない。これは改めなければならない」と主から教えられなければなりません。

愛する兄弟姉妹たちよ。私たちは自らの真相を知ることがほんとうに必要です。自分の何が肉的であり、何が霊的であるかを見分けることが必要です。これを見分けるのは、上から来る光による以外にはありません。

二、三の例を挙げましょう。たとえば預言者イザヤは、天の王座に座す主の栄光を見た時、「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者」（イザヤ6・5）と叫びました。

預言者エゼキエルは、天の神々しい幻を見て「その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。」（エゼキエル1・28）と書いています。

またダニエルは、大きな幻を見て「私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。」（ダニエル10・8）と記しています。

ペテロについては、ルカの福音書に「主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、『きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う。』と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。」（ルカ22・61、62）とあります。

またパウロが主にお会いした時、「彼は地に倒れた」と使徒の働き9章4節に書かれています。ヨハネも主にお会いした時は、「その足もとに倒れて死者のようになった。」とヨハネの黙示録1章17節にあります。このように神の預言者や使徒たちはみな、主の栄光の光に照らされ自らの姿を見せられた時、主の御前でくず折れました。

もし主が、主の光によって私たちの心の目を開いてくださらなければ、私たちは自分がどんなにみじめな者であり、哀れな者であり、憎むべき者であるかを知ることができません。

主はかつて、真剣に真っすぐなみことばをもって聖徒たちに語られたように、私たちに語られたことがあるでしょうか。主のことばは光であってすべてを明るみに出し、神に逆らうものをすべて焼き尽くしてくだ

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

さいます。十字架の働きにより、私たちは主に全く拠り頼む者となりたいものです。

「わたしは、自分からは何事も行なうことができません。」(ヨハネ5・30)とイエス様はおっしゃっておられます。私たちも主と同じようになりたいものです。ただそうなることによってのみ、主イエス様は私たちを真の弟子と呼んで下さるでしょう。しかし、そうなるまでにはたましいの戦いが続きます。

ペテロはそのよい例です。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と言った彼に、イエス様は「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」と、御声をかけられました。ところが、さほど時間もたたないうちに、イエス様はこの同じペテロに「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。」と激しい叱責のことばを投げておられます。

サタンはどのようにしてペテロの心を動かしたのでしょうか。また、サタンはどのようにして私たちにそとがおできになるのです。十字架から離れ、世と妥協するのはサタンの誘いです。

ペテロは自分の関心、自分の思いを通そうとしました。ペテロはサタンと結びつく者となっていました。これは、ペテロが自分に頼っており、主に全く拠り頼んでいなかったことを教えてくれます。ペテロは、たとえ死ぬようなことがあっても私はあなたを否まない、とイエス様に言いました。自らに頼るということは、サタンに結びつくことを意味しています。私たちも、死をも辞さないという思いで主に仕えようと決心してご奉仕しますが、後で主の光に照らされる時、それが自らの力でなされたご奉仕であったことに気づきます。

続いて二番目の点、理想的な学校に入ることの必要性について少し一緒に考えてみたいと思います。

2. 理想的な学校

イエスの救い(12)ご奉仕のための備え

奉仕者のための理想的な学校とはどういう学校でしょうか。自分のため、自分の興味のために、自分の意志からご奉仕することを止め、すべを主にゆだねてことをなすような人々を造る学校でなければなりません。

パウロはピリピ人への手紙3章にあるように、生まれながらのすばらしい能力や学問を身につけていました。しかし「イエス様の学校」に入って、真の奉仕者として備えるべきものを持つ者に造り変えられました。

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました。

(1コリント　2・2、3)

このようにパウロは、イエス様の学校で学んで「イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方の他は何も知らないことに決心した」と言うようになったのです。

の力をふるうのでしょうか。私たち自らが自分を支配しているか、または御霊様によって支配していただいているかによって、サタンの力が及ぶか及ばないかが決まります。

もし私たちが、自分をたましいの支配にゆだねているならば、すべてのことが自らの興味のために、自らの利害のために、自らの満足のためになされていることになり、自分の考えを土台にして生きていることになります。このような歩みをしている間は、私たちはペテロと同じように十字架に向かうイエス様をおしとどめて、イエス様からお叱りを受けるようなことをし続けることでしょう。

しかし、御霊が私たちを支配しておられるなら、私たちのすべては主の興味、主が拠り頼んでおられることだけを思うようになるはずです。神の喜びたもうこと、神が心に留めておられることは十字架です。この十字架を通してのみ、神はご自身の目的を達成するこ

ここで幾つかのみことばを学んでみたいと思います。これらを見ると、私たちの「たましいの働き」がわかります。主イエス様は自分本位の生活からまぬがれる方法は、ただ私たちが日々自分の十字架を負って歩むことと以外にないと教えておられます。

以前のメッセージの中で、私たちの古い人はすでにイエス様とともに十字架につけられてしまったこと、これを信仰によって自分のこととして受け取り、感謝しなければならないと述べました。けれども、ここでいま問題にしているのは、私たちの古い人ではなく、生まれながらの人、生まれながらの能力を言っているのです。私たちはこれから救われなければなりません。次のみことばがそれをよく表しています。

私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。（ヘブル　10・39）

これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。（1ペテロ　1・9）

あなたがたは、忍耐によって、自分のいのちを勝ち取ることができます。（ルカ　21・19）

原語ではこの三か所で、どれも「たましい」が使われています。つまり、「私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じてたましいを保つ者です」。「これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです」。「あなたがたは、忍耐によって、自分のたましいを勝ち取ることができます。」となっています。

ここで言われているのは、私たちのたましいは、古い人と同じように死ななければならないというのではなく、救われなければならない、すなわち「絶えず御霊様の支配のもとにいなければならない」と言っているのです。

ご存じのように人間のたましいの能力は、考えること、感じること、欲することです。すなわち、人間の理解力、理性です。人間の感情と意志です。このたましいが絶えず御霊様の支配のもとにいなければならない、とイエス様はおっしゃっているのです。これが「たましいの救い」であり、イエス様の勝利の現れです。

では次に福音書から四つの箇所を考えてみたいと思います。はじめのみことばはマタイの福音書です。

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。

なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。（マタイ　10・34～39）

このみことばで、主イエス様はご自分の後に従う者は十字架の道を歩むのだと教えておられます。自らの興味、自らの思い、自らの満足などは少しの場も占められていません。「わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」とありますが、「主のために自分のいのちを失った者」とは、自らの願い、自らの思いを十字架によって切り捨てられている者と言う意味です。

もし私たちが真にいのち（たましい）を失っている者であるなら、御霊様は私たちを十字架の道に導き、連れて行ってくださいます。もちろんここでも前に言いましたように、日本語の聖書は「いのち」となっていますが、原語を見ると「たましい」になっています。つまり、39節は「自分のたましいを自分のものとした者は

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

それを失い、わたしのために自分のたましいを殺す者は、それを自分のものとします。」と読めます。

自分のたましいを殺すこととは結局、イエス様と同じような態度をとることになります。「私の思いではなく、私の心ではなく、主よ、あなたの御心がなりますように。自分の考えていること、自分の欲していること、自分の感じていることは決して大切ではありません。あなたの御心だけがなるように、どうか主よ、導いて恵んで下さい」という態度をとることです。これは自分のたましいを殺していることを示しています。これは自分の考えていること、感じていること、欲していることを捨てることです。

いわゆる「平和」また妥協により互いの間に生まれた一致は、何の役にも立ちません。私たちが主イエス様にふさわしい者であるかどうかが問題です。本当に厳しいみことばと言えます。

次にマルコの福音書8章を読みましょう。

しかも、はっきりとこの事がらを話された。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。（マルコ　8・32〜35）

ここでももちろん、いのちが「たましい」になります。ですから、たましいを救おうと思う者、結局自分勝手な道を行こうと思う者は成功しないということを意味しています。「自分のたましいを救おうとせず、わたしとわたしの福音とのためにたましいを殺す者、意識して自分を否定する者はたましいを救う」と主は言っておられるのです。

主イエス様がこれから多くの苦しみを受け、十字架にかかるために進もうとされた時に、ペテロはイエス様を自分の考えでいさめました。ペテロはイエス様がいのちをお捨てになるのを望まなかったのです。自分のいのち、自分の意志をイエス様に明け渡そうとしない私たちは、ちょうどこのペテロのような者ではないでしょうか。ペテロはイエス様に「どうか、ご自分のいのちを大切になさって下さい」といさめたのです。主の御心よりも自分の思いを優先させたのです。

しかしイエス様の心は、自分の興味、自分の思い、自分の満足に傾いておられませんでした。イエス様はただ父の御心のみを思っておられました。ですからイエス様は「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。たましいを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにたましいを失う者はそれを救うのです」と述べられたのでした。

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

私たちはどうでしょうか。神様の御心を愛しているでしょうか。私たちは主の御心を行なうだけなのでしょうか。または主の御心を愛しているのでしょうか。私たちは「主の御心を行ないたい」としばしば考えるのですが、主の御旨（みむね）を行なうのに愛がともないません。主イエス様のお喜びになること以外の何物も望まない者となりたいものです。

ペテロ自身はイエス様のために言っていると思っていましたが、神の目から見るとそれは不純なものに見えたのです。なぜならペテロは神様のことだけを思っていたのではなく、神様のことを半分、自分のことを半分思っていたからです。ですからイエス様は、ペテロがご自分のことを愛してそのように言ったのを知りながら「下がれ。サタン。」と厳しくお叱（しか）りになったのでした。

三番目にルカの福音書から一か所読みましょう。

ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。

ロトの妻を思い出しなさい。自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝台で男がふたり寝ていると、ひとりは取られ、他のひとりは残されます。女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりは取られ、他のひとりは残されます。

（ルカ　17・29～35）

ここでは主イエス様はご自分の再臨の時を語っておられ、再臨される時代はロトの時代のようだと教えておられます。ロトと家族は、罪深い町ソドムとゴモラが滅ぼされた時、そこから助け出されました。再臨の時も同じようであるとイエス様は語っておられます。ある者は残され、ある者は取り去られるであろうと。

しかしここで注目すべきみことばがあります。なぜイエス様は「ロトの妻を思い出しなさい。」と言われたのでしょうか。続けてイエス様は「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」と話されました。もちろん、ここでも「たましい」のことを言われています。自分のたましいを救おうと努めた者はそれを失い、それを否定する者、殺す者はいのちを保ちます。ロトの妻は信仰があったにもかかわらず、この世のことを思い、後ろを振り返ったために塩の柱になりました。

ところで私たちは、主イエス様のご再臨を待ち望みながら、携え上げられるのを楽しみにしているでしょうか。主のお喜びになること、主の御心、主の思いが、私たちの生活の中で第一の場所を占めているでしょうか。

ここに、ある者は残され、ある者は取り去られると書いてありますが、これは私たちが真剣に考えなければならないみことばです。主イエス様は私たちがどのように備えをしなければならないかを教えておられます。

だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。

（マタイ　24・42）

主から目を離さず目を覚ましていなさい。もし意識して主に従わず、主の御心に反して未信者と結婚したり、地上のことを思い、自らのために自らの力で奉仕しているとしたら、その人は主の再臨に備えができていると言えるかどうか問題です。

自分にとって主がすべてであるならば、私たちは主の再臨に備えができていると言えます。もし地のことだけを思い、自分のことだけを思っているなら、ロトの妻と同じ運命に陥るでしょう。

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

私たちのいただいた賜物が、主よりも高い位置を占めていることはないでしょうか。また私たちのご奉仕が、主よりも高い位置を占めることはないでしょうか。これは大切な質問です。私たちが自らの力で生きているか、または御霊様だけによって生きているかをはっきりさせる質問です。

私たちはあらゆる人間関係、あらゆる事柄から十字架によって解き放たれ、ただ主と主に関することだけに結ばれているでしょうか。もしそうなっていなければ、主の再臨は私たちにとって喜ばしいものではなく、恐ろしいものに感じるに違いありません。

パウロは教会のために戦い、教会を愛して、次のように語っています。

私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

（2コリント　11・2）

結婚する前に花嫁が他の男を愛しているなら、花嫁を迎える花婿は決して快く思わないでしょう。私たちすべてが十字架を負い、イエス様がおいでになる時、共に喜び合うことのできる者となりたいものです。

次に第四福音書のヨハネの福音書から2節だけお読み致します。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。

（ヨハネ　12・24、25）

ここでもいのちではなく、たましいのことが言われています。つまり「自分のたましいを愛する者はそれを失い、この世でそのたましいを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです」と書いてあります。たましいはこれまで見てきてわかりますが、自らの興味、自らの意志、自らの思いを意味しているのです。

一粒の麦は主イエス様の御姿をあらわしています。麦の粒はいのちを宿していますが、もし地に落ちて死ななければ、いのちが現れて実を結ぶことができません。同じように主イエス様は永遠のいのちを持っておられましたが、もし死ななければ麦一粒の状態と同じだったはずです。主イエス様は、私たちの罪の贖（あがな）いのためだけでなく、多くの実を結ぶために死なれました。私たちにご自分のいのちを分け与え、そのいのちを広げるために亡くなられました。

パウロはこの実を結ぶために、イエス様の死と等しくなり、たましいを死に渡し、自らの内にイエス様のいのちが現れるように努めました。彼はコリント人への手紙に次のように書いています。

私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのです。　（2コリント　4・11、12）

愛する兄弟姉妹よ。これこそ実り多いご奉仕、まことのご奉仕の秘訣です。もちろん新しく生まれ変わった者は永遠のいのちを内に宿しています。しかしどうして今日、打ち負かされた、勝利のない、喜びのないクリスチャンが多いのでしょうか。なぜ、内に宿しているいのちを外に現わしていくことができないのでしょうか。

それは私たちの内に宿っているイエス様のいのちを、あたかも麦の殻が麦の実を包んでいるように私たちのたましいの働きにより、圧（お）し包んでしまっているからです。

イエス様の弟子たちを思い出してください。ヤコブとヨハネは神に従わない町を見て、天より火を下してその町を焼き尽くすようにと主に願いました（ルカ9・54参照）。これももちろん、人間的な考えだったのです。ペテロはかつて、死んでも私はイエス様を拒まないと自らに頼り豪語しました（マルコ14・31参照）。また他の弟子たちは、お互いに言い争い、誰が一番偉いかと論争しました（ルカ22・24参照）。

しかし、弟子たちは十字架の上で亡くなった主を知り、よみがえられた主イエス様にお会いし聖霊を受けて、この聖霊によって全く違った人間に形造られていったのでした。彼等は自己に死に、愛に満ち、忍耐深く、謙遜で、恐れがありませんでした。彼等にとって知恵や名誉や自らの影響力、成功、人気などは問題ではありませんでした。彼等は岩のように堅い自我から解き放たれ、御霊に導かれる生活に入っていったのです。

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

3. ご奉仕の秘密

第三番目になりますが、ご奉仕の秘密について考えてみたいと思います。

一体なぜ、クリスチャンの間にはこんなに大きな開きがあるのでしょうか。ある人々は自分のことだけを考え、またある人々はイエス様に喜ばれるにはどうしたらよいのかと心を用いています。ある人々は何の喜びもなく、義務的に聖書を読みます。これに対して、ある人々はみことばから喜びと力と導きを得るために喜びをもって聖書を読みます。

自分のことばかり考えていた弟子たちは、後になってどうしてあれ程変わったのでしょうか。それは、弟子たちが十字架を負って、自らをそこにつけたからです。マルコの福音書8章34節が弟子たちの生活を変えることになった秘訣でした。

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

（マルコ　8・34）

自分の考えていること、自分の感じていること、自分の欲していることを捨ててイエス様に従うことこそ、彼らの変えられた生活の秘訣だったのです。自分の十字架を負わず、立場や名誉や人気を考えている人々はイエス様の御心にかなわず、イエス様はそのような人々に、「お前は私にふさわしくない」とおっしゃるのです。これらの人々にイエス様は「私の弟子になることはできない」とおっしゃるのです。

自分の思いのままにしていた生活は、日々十字架につけられ、イエス様のいのちが私たちの生活を通して現われていかなければなりません。これを知るために、最後に三つの例話を挙げて考えてみたいと思います。初めに民数記17章からです。

主はモーセに告げて仰せられた。

「イスラエル人に告げて、彼らから、杖を、父の家ごとに一本ずつ、彼らの父祖の家のすべての族長から十二本の杖を、取れ。その杖におのおのの名を書きしるさなければならない。レビの杖にはアロンの名を書かなければならない。彼らの父祖の家のかしらにそれぞれ一本の杖とするから。あなたはそれらを、会見の天幕の中のわたしがそこであなたがたに会うあかしの箱の前に置け。わたしが選ぶ人の杖は芽を出す。こうしてイスラエル人があなたがたに向かってつぶやく不平をわたし自身が静めよう。」

モーセがイスラエル人にこのように告げたので、彼らの族長たちはみな、父祖の家ごとに、族長ひとりに一本ずつの杖、十二本を彼に渡した。アロンの杖も彼らの杖の中にあった。モーセはそれらの杖を、あかしの天幕の中の主の前に置いた。その翌日、モーセはあかしの天幕にはいって行った。すると見よ、レビの家のためのアロンの杖が芽をふき、つぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結んでいた。モーセがその杖をみな、主の前から、すべてのイスラエル人のところに持って来たので、彼らは見分けて、おのおの自分の杖を取った。

主はモーセに言われた。「アロンの杖をあかしの箱の前に戻して、逆らう者どもへの戒めのため、しるしとせよ。彼らのわたしに対する不平を全くなくして、彼らが死ぬことのないように。」モーセはそうした。主が命じられたとおりにした。

（民数記　17・1～11）

イスラエルの民は、祭司としてのアロンの立場が神からきたものかどうか異を唱えました。アロンは真に神から召し出され、その成す奉仕が真の奉仕かどうかが疑われていました。そこで主は、誰が召しにかなう真の奉仕者であるかを明らかにするために、モーセに命じて、すべての族長から一本ずつ杖を出させ、杖に各族長の名前を書いた後、十二本の杖を会見の天幕の中のあかしの箱の前に一晩置かせました。

すると翌日、アロンの杖から芽が出、つぼみが付き、

イエスの救い（12）ご奉仕のための備え

花が咲いて、実が実っていました。一晩中杖は、真っ暗で人目につかない所にありましたが、翌日見てみると見事に芽が出、実が実っていたのです。

真っ暗な死の経験を通って初めて主に認められる真の奉仕者となることができるのです。

よみがえりは死を通してきます。復活のいのちは死ぬことによってもたらされます。実は暗い内を通されてはじめて結ばれます。

二番目の例は、たびたび見てきましたペテロです。はじめペテロは自らにより頼んでおり、「死ぬようなことがあっても、あなたを拒みません」と言いました。ペテロはまた自らの力をふるって、主を逮捕しに来た兵隊の耳を切り落としました。しかし主はこのようなしもべを用いることはできません。ペテロは暗いところを通らされなくてはなりませんでした。

ペテロが否んだ主は十字架につけられて死んでしまいました。それからの三日間、ペテロは深い絶望と暗闇の中に落とし込まれました。この忘れることのできない三日間の体験が、後のペテロのご奉仕に重大な影響を与えたのです。

最後にヤコブの例を考えてみましょう。創世記32章「ヤボクの渡し」での出来事です。

イサクの子ヤコブは主に仕えようと願っていましたが、まだ自分の「好み」を持っていました。彼は神の御心をなそうとしましたが、まだ自らの力を用いていました。真に神に仕えるためには、この自らの力は砕かれなければなりません。自分のその時の状態に、ヤコブは満足を覚えていませんでした。そこで彼は主に叫んだのです。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」(創世記32・26)と言いました。これは実に激しい戦いであり、これによって彼は自らの力で歩むことができない身とさせられました。

その時以来、欺(あざ)むく者という意味のヤコブの名は変えられ、「神は戦う」という意味のイスラエルと変えられました。戦いの後、ヤコブは歩くことはできたものの、もものつがいが外され、それまでとは違った格好(かっこう)になっていました。つまり自らの力が砕かれたのです。私たちもそこまで進んで行かなければなりません。そのときには自らに頼れるものが一切なくなります。そうなってはじめて、私たちは何をなすにも主に拠り頼んでするようになるでしょう。

証しをするのにも、人を主に導こうとするにも、自らの力に拠り頼まず、ただ主が私たちを通してお働きになるご奉仕だけが、永遠の実を結ぶことを知る者となるでしょう。

私たちはすでに自らを厭(いと)い、自らに頼ることがいかに恐ろしいことであるかを知ったでしょうか。「私たちの思いか、主の思いか」、「私たちの興味か、主の目的か」、これらの心の戦いは、生涯私たちに付きまとうでしょう。私たちは生れながら、自分にばかり心を配る性質をもっていますから、主イエス様は私たちが自分の力がどんなに虚しいものかを悟るよう、訓練の場に私たちを導いて下さるのです。

私たちもパウロと同じように、次のように言うことができれば、本当にすばらしいことだと思います。パウロは「神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。」(ピリピ3・3)と告白する者となったのです。

そしてローマ人への手紙15章17節から19節までに次のように書き記しています。これもすばらしい真の神のしもべの証しです。

それで、神に仕えることに関して、私はキリスト・イエスにあって誇りを持っているのです。私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂(と)げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行ないにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によっ

イエスの救い(12)ご奉仕のための備え

て、それを成し遂げてくださいました。

（ローマ　15・17～19）

このように言うことができたら、真に幸いです。私たちも霊的なご奉仕のためのこの備えを、主からいただいてキリストのしもべになることができたら、ほんとうに幸いです。

本メッセージは、「ロバの子サーバー」の「ベック兄 暦年ファイル」に録音されています。



雪よりも白く

山下 彰

冬になって雪の話題が出てくると、私は以前住んだことのある新潟県新井（現在の妙高市）のことを懐かしく思い出します。この地方はたいへん雪深いところで、市内でも積雪が多い時には二メートルに達するほどでした。また、日本海側特有の気候で、いつもどんより曇っていて、なかなか太陽が顔を出すことはありませんでした。しかし、たまに晴天に恵まれた早朝には降り積もった真っ白な雪が何もかもを覆ってキラキラと光り輝く姿を見ることができるのです。その光景はとても美しく、思わず主に感謝する気持ちで胸がいっぱいになった事を忘れることができません。けれども、残念ながらその素晴らしい景色も長続きはしません。

雪よりも白く

雪国では、メイン道路の中央部分に消雪パイプを埋め込んで井戸水を噴水のように出して雪を融かします。この除雪システムは生活のために必要不可欠なのですが、雪の中から姿を現す道路は鉄分を含んだ地下水によって赤茶け、その周りに残っている純白の雪と比べるとどうしようもないくらい汚いのです。それは、あたかも覆われ隠されていた私の中にある黒い汚いものが表に出てきたかのように見えたのです。

私はこの有様を見て、神様がこの道路のように汚い真っ黒な私の内にある罪を光り輝く真っ白な雪で覆ってくださっているのだ、との実感を持つことができたのです。

聖書に雪をたとえにして記している箇所があります。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。もし喜んで聞こうとするなら、あなたがたは、この国の良い物を食べることができる。しかし、もし拒み、そむくなら、あなたがたは剣にのまれる。」と、主の御口が語られた。（イザヤ　1・18〜20）

主なる神様は「さあ、わたしのところに来なさい、論じ合おう」と私たちに呼びかけておられます。論じ合うとは、自己の立場や意見を主張し合うということですが、私は神様が私たち人間の目線まで下りて来て親しく交わりを持とうと言ってくださっているように思えてなりません。

続けて、神様は人間の罪がどんなにひどく赤く染まっていても雪のように白くすると語ってくださっています。そして、私たちが神様のことばを喜んで聞こうとするなら、この国（主がご支配される国）で良いもの（ぶどう酒や穀物）を食べることができる。つまり、神様を信じる者は、神様との平和を持って生きながらえることが約束されているのです。このみことばの真意は、私たちがたといどんな罪の中にあっても、その罪がどんなに大きく深いものであったとしても「もうだめだ」と絶望する必要はないということです。緋のように赤く染まった罪であっても、赤茶けた新井の道路のように汚れていても、贖われて雪のように白く、羊の毛のようになるという全知全能の神様が保証されている約束なのです。これは、神様のところに来て神の御子イエス・キリストを受け容れるならば私たちの罪が贖われることを意味しています。これこそ福音であり、なんと感謝なことでありましょうか。

しかし、主のことばを聞いても、これを拒み背くならば、私たちは剣にのまれる。即ち、私たちは滅び死んでしまうと言われているのです。神様が要求されている救いの条件とは、私たちが主なる神様の語られるみことばを喜んで聞き、主に従う姿勢、態度を持つことです。

それでは、具体的には何をすることなのでしょうか。このみことばの少し前にその答があります。

洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。（イザヤ　1・16、17）

「洗え。身をきよめよ。」とありますが、これは体を洗ってきよめるという儀式的なきよめの洗いのことではありません。人間の内面である心をきよめること、霊的な聖めのことを言っています。神様は心からの悔い改め、即ち、私たちが回心することを要求されているのです。そして、実際的な行動として、あなたがたの悪を取り除き、悪事を働かず、善をなし、公正で、憐れみ深く、さばきや弁護をしなさい、と続くのです。申命記にも同じようなみことばが記されています。

私が、きょう、あなたに命じる命令――おきてと定め――を守り行なわなければならない。それゆえ、もしあなたがたが、これらの定めを聞いて、これを守り行なうならば、あなたの神、主は、あなたの先祖たちに誓われた恵みの契約をあなたのために守り、あなたを愛し、あなたを祝福し、あなたをふやし、主があなたに与えるとあなたの先祖たちに誓われた地で、主はあなたの身から生まれる者、地の産物、穀物、新しいぶどう酒、油、またあなたの群れのうちの子牛、群れのうちの雌羊をも祝福される。あなたはすべての国々の民の中で、最も祝福された者となる。（申命記　7・11〜14）

ここには、主なる神様が命じるおきてと定めを聞き、主に従うことが要求されています。神様の命令を守り

雪よりも白く

行なうならば、神の愛と恵みに満たされ、最も祝福された者となるという恵みの約束が用意されているのです。しかしながら、私たちはこれらのことを実行することができるのでしょうか。イザヤ書で主なる神様は次のように言われています。

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。（イザヤ　43・25）

「わたしは、このわたしは、」と何度も「わたし」と神ご自身を表すことばが出てきますが、聖書は人間が中心なのではなくて、神様が中心である事をいつも強調しています。これは、罪の問題の解決は神様がなされるものであり、人間の思いや願いや努力、頑張りなど人の力によってなされるものではないことを示唆しているのです。

神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

（ローマ　9・15、16）

私たちは、事は人間の願いや努力によるのではなく神様のあわれみによるという事実を覚える必要があります。神様があわれみ、いつくしんでくださらなければ罪の解決はあり得ないということです。それでは、神様があわれみいつくしむ者とは、いったい誰のことを指しているのでしょうか。主はどのような者に対して、あわれみいつくしんでくださるのでしょうか。

ヤコブよ。これらのことを覚えよ。イスラエルよ。あなたはわたしのしもべ。わたしが、あなたを造り上げた。あなたは、わたし自身のしもべだ。イスラエルよ。あなたはわたしに忘れられることがない。わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。（イザヤ　44・21、22）

主は、「ヤコブよ。…イスラエルよ」と、二つの名を呼んでいますが、ヤコブは後に「イスラエル」と呼ばれるようになりましたので同一人物です。主は、このヤコブ個人に対して、わたし自身のしもべと呼び、あわれみいつくしまれて、背きの罪をぬぐい去り、贖われたのです。そして、イスラエルとはヤコブの子孫であるイスラエル人をも示しています。

パウロは、イスラエル人をこう言っています。

彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。（ローマ　9・4、5）

このように神様はイスラエル人に様々な賜物を与えられています。彼らが選民と呼ばれる所以ですが、一方でパウロは次のようにも語っています。

アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。

（ガラテヤ　3・6、7）

アブラハムはヤコブの祖父でもありイスラエル人の先祖ですが、ここでは信仰による人々こそがアブラハムの子孫であると言っているのです。つまり、イスラエル人だけでなく異邦人であっても信仰を与えられた者は主なる神様から選ばれ、あわれまれ、いつくしまれた者だということなのです。さらに、イザヤ書にはこうあります。

雪よりも白く

地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。

（イザヤ　45・22）

つまり、ご自身が造られた地の果てにまで住む、主なる神様を仰ぎ見るすべての者があわれみいつくしまれる対象となっているのです。ですから、私たち異邦人であっても、主にあわれみを受けいつくしまれ救われるという希望があるのです。

さて、私は雪を見ると、思わず口ずさむ大好きな聖歌四五八番があります。

墨より黒き心なれど　雪より白く洗われたり
きみのもとにゆきし時に　重荷はすべて去れり
今はただイエスを信じ　喜びかぎりなし

墨よりも黒い心、真っ黒けで罪まみれの者が雪よりも白く洗われた。イエス様のところに行けば、罪の重荷は消えて無くなり、今はイエス様を信じて喜びに満たされているという賛美です。それでは、歌詞の出だしにある墨より黒い心は、何によって洗われたのでしょうか。

ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。

（詩篇　51・7）

この詩篇の作者は、「ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。」と祈りましたが、ヒソプを使えば雪よりも白くなることができるということなのでしょうか。ヒソプとは辞書によると、「イスラエルの山野の至る所に自生し、また栽培される植物で、夏から秋にかけて小さな淡紫色のくちびる状の花をつける路傍に生える雑草であるが、花は香らない。しかし、もし葉をちぎるならば芳香を放つのである。傷つけられると香る草である。」とあります。傷つけられると香る草とは若干意味深長ですが、イスラエルでは何処にでもある雑草のようですから、ヒソプ自体には雪よりも白くする漂白剤のような薬効は無さそうです。

それではなぜヒソプをもってと書かれているのでしょうか。

聖書からヒソプが使われている箇所を見たいと思います。

そこで、モーセはイスラエルの長老たちをみな呼び寄せて言った。「あなたがたの家族のために羊を、ためらうことなく、取り、過越のいけにえとしてほふりなさい。ヒソプの一束を取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血をかもいと二本の門柱につけなさい。朝まで、だれも家の戸口から外に出てはならない。主がエジプトを打つために行き巡られ、かもいと二本の門柱にある血をご覧になれば、主はその戸口を過ぎ越され、滅ぼす者があなたがたの家にはいって、打つことがないようにされる。

あなたがたはこのことを、あなたとあなたの子孫のためのおきてとして、永遠に守りなさい。また、主が約束どおりに与えてくださる地にはいるとき、あなたがたはこの儀式を守りなさい。あなたがの子どもたちが『この儀式はどういう意味ですか。』と言ったとき、あなたがたはこう答えなさい。『それは主への過越のいけにえだ。主がエジプトを打ったとき、主はエジプトにいたイスラエル人の家を過ぎ越され、私たちの家々を救ってくださったのだ。』」すると民はひざまずいて、礼拝した。

（出エジプト　12・21～27）

これは、エジプトの地で奴隷として虐げられていたイスラエル民族がエジプトを脱出する前夜に起こった出来事で、過ぎ越しの祭りの起源となっています。この時にヒソプが使われました。イスラエル人はヒソプをいけにえとして屠られた子羊の血に浸し、それを門柱やかもいに塗ったのであります。すると、神様は、この血を見て過ぎ越され、ヒソプによって血を塗られた

家にはさばきを下されなかったのです。
もう一つヒソプが出てくるみことばを見たいと思います。

モーセは、律法に従ってすべての戒めを民全体に語って後、水と赤い色の羊の毛とヒソプとのほかに、子牛とやぎの血を取って、契約の書自体にも民の全体にも注ぎかけ、「これは神があなたがたに対して立てられた契約の血である。」と言いました。また彼は、幕屋と礼拝のすべての器具にも同様に血を注ぎかけました。

（ヘブル　9・19〜21）

この箇所では、ヒソプはきよめの儀式に登場しています。いずれもヒソプが使われている時には必ず血が関与していることがわかります。

実はヒソプそのものではなく、それが浸された血こそが重要なのです。みことばによりますと、血とは、贖いときよめ、罪の赦しを成就するものです。

いのちとして贖いをするのは血である。

（レビ　17・11）

それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

（ヘブル　9・22）

詩篇の作者は、これらのことを念頭において、「ヒソプをもって」と記したのではないでしょうか。つまり、ヒソプを浸した血をもって私の罪を除いてきよめてください、と神様に祈ったのではないでしょうか。

そして、この血はどんなものでもよいというわけではありません。羊や子牛や山羊の血ではなく、イエス様の血でなければならないのです。

また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするとすれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とすることでしょう。

（ヘブル　9・12〜14）

傷のないキリストご自身、罪の無いイエス様の血でなければ、墨よりも黒い私たちの罪ある心を雪よりも白くし、羊の毛のようにすることはできないのです。

そして、私たちは、イエス様が十字架で流された血によって贖われたことを信じ、自分の罪を悔い改めて主のみもとに立ち返った時、罪の縄目から解放され、今までの死んだ行ないから主にあって生ける者へ、また神様に仕える者へと変えられるのではないでしょうか。

主イエス様が私たちのためになしてくださった十字架の御業に心から感謝します。



山下 彰（芦屋キリスト集会）

雪よりも白く

神のなさることは、すべて時にかなって美しい

井上 公子



公子さん

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行われるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。

（伝道者　3・11）

生い立ちと家族

私は一九三二年に京都市で生まれ、子供時代を過ごしました。ごく普通のサラリーマン家庭でした。長女の私は、五歳の頃に死産で生まれた妹に出会って、人の死を恐れるようになりました。その後ふたりの妹と弟が生まれて四人きょうだいで育ちました。一九四四年、私が十二歳の時、私たち家族は母方の祖父母と同居する為に、島根県大田市に移住しました。同時に私は女学生になりました。太平洋戦争の末期でしたから、学校では勤労奉仕の毎日でした。そして一年半後に迎えた終戦の日、八月十五日、私は家族とラジオの玉音放送を聞きました。私が生まれる少し前に満州事変が起こり、その後支那事変、大東亜戦争と拡大の一途を辿った戦争でしたが、最後に米軍による原子爆弾の攻撃があり、遂に日本が無条件降伏をしたのでした。家の外に目を向けると、澄みきった夏空に青々とよく耕された田園が、山のふもとまで広がっていました。私の心に何時までも残っています。

学校では戦後の新教育が始まり、新設された「社会科」の授業の時でした。新任の先生が黒板に書かれたのが「創造主」の言葉でした。神様が天と地のあらゆる物を造られ、人も造られたことが私の心の中に入りました。

私の家は、祖父母が先祖から譲り受けた農家でした。戦時下の不自由な暮らしが終わり、少しずつ豊かになってきた頃、いつの間にか家の中に冷たい戦争が起きていました。私はその頃、母の気苦労にも目を向けず、自分の世界に逃げ込む事しか考えていませんでした。人間は争い好きであり、世の中には戦っている人々が満ち溢れていると思いました。父は義父（私にとっては祖父）とついに和解することなく、義父の死を迎えました。その時すでに父自身もがんに侵されていたのですが、五十九歳だった父が死を目前にして苦しんでいる姿を見た私には何も語る言葉がなく、思わず心の中で「神様助けて下さい」と叫んでいました。

主は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。彼らはみな、離れて行き、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもいない。

（詩篇　14・2、3）

社会人になって

その後私は、教員免許状を取得して隣の村の小学校に勤務しました。

ある日通勤の帰り道、美しい歌声に惹かれて立ち

寄った所がありました。伝道集会が行われていたのです。一九五〇年頃でした。戦後、「雨後の筍」のように生まれた教会が、山陰の小さな町にもありました。讃美歌「慈しみ深きともなるイエスよ」は、懐かしい曲です。フランネルグラフに貼り付けた絵を指しながら、聖書が語られていました。ヨハネの福音書4章でした。サマリヤの町、そこにあったヤコブの井戸、ひとりのサマリヤの女が水を汲みに来た時のイエス様の言葉です。

わたしが与える水を飲むものはだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

（ヨハネ　4・14）

私は宣教師のお話に引き込まれました。心が休まるのを覚えて、日曜礼拝、夜の集会に暫く通っていました。父は「耶蘇」と言って嫌っていました。私が父の意思に反したのは初めての経験でした。

子育て時代

一九五四年、私は、親戚の紹介でお見合いをして、井上昇と結婚しました。長女直子が生まれたのは、一九五八年です。公園で子供を遊ばせながら「婦人之友」を読んでいる方から幼児教室を紹介されました。キリスト者である年配の方が自宅を開放されて、一歳から三歳までの子供と母親のために学びの場を開かれていました。「子育ては育児書に頼るのではなく、頼るのは聖書です」。これがその方の信仰でした。そこで食前のお祈りを初めて経験しました。その後私は、羽仁もと子著作集を読み、聖書に基づいた教育に目覚め、主人と話し合いながら長女を自由学園初等部に入学させました。とてもユニークな学校で、家庭での生活も学びの場でしたから、親の勝手な行動は教育の妨げになることを自覚しない私は、学校との協力体制になじめず、いつも失敗を繰り返していて、本当に悩みの多い六年間でした。そのことを主事先生にお話しする機会がありました。先生はひとこと「感謝はないのですか」と問われました。恥ずかしさのあまり、何時までも忘れられない思い出となっています。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブル　12・11）

教会生活

一九七五年の八月に八王子に新築の家が与えられました。犬の散歩で知り合った方に誘われて、片倉駅前の自宅で伝道しておられる牧師のところへ行きました。新約聖書を読んで牧師のお話を聞くうちに、私の心に初めてみことばが入ってきました。特に「愛の章」とよばれている第一コリント13章を繰り返し読みました。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。

（1コリント　13・4）

皆さんと親しくなった頃、その牧師が府中の日本基督教団の教会に招聘され、私たちも府中の教会の礼拝に集うようになりました。やがて教会員となり、洗礼のことを考えるようになりました。その時突然に、「私は妻として、また母親として神様に従わず、罪を犯して来たこと、自分勝手に振舞ってきたことが、的外れなことであった」と気付いてやりきれない気持ちになりました。涙が流れました。「神様ごめんなさい」と言って祈りました。私が救われた瞬間でした。

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い

改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。（マタイ　18・3）

一九八三年、長女直子は、千葉牧師によって洗礼の恵みに預かり、磯田善也さんとの結婚に導かれました。

吉祥寺キリスト集会へ

一九八四年、私は片倉の教会で知り合った方々を通して八王子で行われるキリスト集会の家庭集会を知りました。また、次女純子が軽井沢のバイブルキャンプに心を動かされ、二人で参加することになりました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

バイブルハウスの広間に掲げられていたみことばです。イエス様は家族がひとつになるように望んでおられ、私にとって今必要なものは祈りであることを示されたのです。

「聖書はすべて神のことばです」、「聖書は何と言っていますか」このことをベックさんから聞いて、私の心の目が開かれたようでした。

一九八五年、私の母が危篤状態になったとの知らせを受け、次女を連れて会いに行きました。私は弱っている母の前でお祈りをしました。そして母に感謝の言葉と、天の御国を伝えることが出来ました。母は笑顔でうなずき安らかでした。数年前にこの世を去った父のことが思い出され、母と天国で会うことが出来るように祈りました。

栃木県に移住

次女純子は、イエス様の憐れみによってキリスト集会に集っている井上裕之さんとの結婚に導かれました。そして宇都宮市に隣接する壬生町に家が与えられました。

弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。（ヨハネ　9・2、3）

このみことばに慰められて平安をいただきました。強士は両親と共に集会に集いながら成人しました。現在は親元を離れ、福祉施設で働きながらグループホームにて自立する生活に導かれております。時々御代田の福音センターに集い、主を見上げてともに祈ることが出来る恵みをいただいています。

宇都宮キリスト集会に、共に集うことに喜びを与えられた主人、昇は主の前に自分の罪の告白をして救われ、二〇〇四年に洗礼の証に導かれました。

「ドイツ喜びの集い」

二〇〇四年、ドイツにて喜びの集いがありました。私の妹、弟たちがそれぞれ夫婦揃って、私たちと一緒に参加することが出来たのです。妹夫妻が、それぞれに喜ぶ姿に感謝しました。ベックさんとお話しすることは予想外のようでしたが、そのあとで六人は、顔を突き合わせて、イエス様のことについて語り合うことが出来ました。心を開いて、信仰のことを語り合ったのは初めてでした。

私は、突然に、以前から主人に感謝の言葉を伝えることが出来なかったことが思い出されたのです。それを思いのまま口に出した時、涙が出ました。それぞれの思いが吐き出され、みことばの種がまかれた時でした。カメラが趣味だった義弟は、沢山の写真を撮影していました。後になって病が与えられた時、この時の写真を病床でいつも喜んで見入っていたのを覚えています。私たちの会話は何時も、ドイツでのことでした。天国で再会できると信じています。

二〇〇六年　私の実弟夫妻も私たちとともに「喜びの集い」に参加しました。行きの長い飛行時間の中で、主人の様子が変わり始めたのですが、思慮の足りない私は、それを異常事態と認識することが出来ませんでした。その後結果として、大きな失策を体験することになりました。認知症を発症した主人が散策中に道に迷い、戻れなくなってしまったのです。喜びの集いに参加した全員が熱心に祈って下さり、夕方になってやっと連れ帰ることができました。怪我もなく、無事に救出されたことは、主の憐れみであったことを深く思わされ、心から感謝しました。あの時の私は、思いがけない試練に遭って、いっぺんに地面にたたきつけられたように、ペチャンコなってしまいました。ただ、静まって待ちながら、イエス様がなさることは最善であるはず、と信じて祈っていました。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。　（詩篇　34・18）

二〇一二年、主人昇の召天については集会の冊子（『主は生きておられる』29号）に、納骨式の証しとして掲載されています。

終わりに

栃木は車社会です。八十六歳になった私が便利に暮らせる場所を探しました。二〇一八年、高齢者用住宅に入居した後、示されるままに移り住むことになったのが三鷹市の団地でした。もう六年目になります。主と共に歩む日々を感謝しています。

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。
主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。　（哀歌　3・22～24）

井上 公子（いのうえ きみこ）
現在　東京都三鷹市在住
長女　磯田 直子（いそだ なおこ）
次女　井上 純子（いのうえ じゅんこ）
孫三人



6人の証し

Unser HERR lebt

主はすべてのことを最善へと導いてくださる

今橋 達男



達男さん（後列左）。妻・由実子さん（後列右）、
義母・富田葉子さん（中央）、お孫さんたちと

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。（伝道者　3・11）

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。（伝道者　3・1、2）

私の家内、由実子は三歳年下で、名古屋生まれの名古屋育ちです。家内が私たち家族の初穂となり、家族をイエス様のもとに導いてくれました。私は家内と結婚していなければ、イエス様を信じる者にはなっていなかっただろうと思っています。神様は、家内と出会うことにより、私を最善の道に導くことができると考えられたのだと思います。

私は、高知市から西へ約三十キロのところにある父親の実家で生まれ、小学校三年生の時に、高知市内に引っ越しました。

私は、高校時代には吹奏楽部の部活動に熱中してしまい、受験勉強がおろそかになり、希望する大学に合格するような学力はありませんでした。しかし、神様はこんな私を、いろんな方法を用いて名古屋の大学に行くように導いてくださいました。そして、サッカーに熱中しすぎて大学を四年間では卒業できず、五回生となった時に家内と出会い、卒業後結婚に導かれました。その時にはまだ二人とも神様を信じてはいませんでしたが、結婚は神様の導きによったものと信じています。

すなわち、神は私たちを世界の基（もとい）の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖（きよ）く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。（エペソ　1・4、5）

私は、大学卒業後、名古屋にあるバス関係の電気製品を製造販売している会社に就職しました。私は、人見知りで口下手なので、営業担当にはしないように人事担当者にお願いをしていました。最初は出荷検査をする部署に配属になりましたが、七年目にどうしても私でなければできない仕事なので東京営業所に行って欲しいと言われ、しぶしぶ東京営業所に転勤することになりました。

長女の綾子が二歳、家内は妊娠中という時に、千葉市内にある公団に引っ越しました。引っ越しが一段落した時に家内の具合が悪くなり、病院に行ったら、流産ですと言われました。かなりのショックを受けましたし、家内にも悪いことをしてしまったと思いました。

家内もつらい思いをし、命のはかなさを感じていたようです。そんな時、家内は近所の公園に長女を連れて遊びに行ったときに知り合った奥さんに心境などを話していると、近くにある教会に行ってみたらどうかとすすめられたようです。

家内はミッション系の短大を卒業していたのでイエス様のことは知っていたのですが、それまではまったく思い出さずにいたのが、その時にはっきりと思い出したようです。それから家内と綾子は、教会に行くようになりました。初めての教会です。私は、教会までの送り迎えをし、家内たちが教会にいる間は近くの喫茶店で時間をつぶしていました。

東京営業所での私の仕事は、群馬県伊勢崎市にある富士重工のバスを作っている会社の担当でした。二年半後、富士重工との関係をもっと密にして、注文を増やしていきたいという会社の方針で伊勢崎に出張所を新設することになり、流産の後に生まれた長男の玄太が一歳になるときに伊勢崎に引っ越しました。事務所を開き、備品を揃えましたが、そこで働く人は、私一人でした。打合せや製品の納期管理はもとより、出張所の総務の仕事、経理の仕事、事務所の整理、掃除に至るまですべてのことを一人で行なわなければなりませんでした。通勤時間は約二時間から約十分に短縮されましたが、朝から日付が変わる時間まで、毎日働かなければなりませんでした。

家内と子供たちは、家から歩いて十分くらいのところにある福音伝道教団伊勢崎教会というところに行くようになりました。私は、教会主催の行事に運転手として参加するだけで、礼拝には行っていませんでした。伊勢崎の教会に集うようになって三年後に家内が洗礼を受けることになりました。その頃から、綾子と玄太の二人だけのための日曜学校が私の家で始まりました。日曜学校の先生が家に来てくださり、綾子と玄太にイエス様のことをいろいろ話してくださいました。綾子と玄太は、楽しそうに賛美をしていました。それから、少しずつイエス様のことが好きになっていったようです。私は、疲れていたので、隣の部屋でその様子をうかがいながら寝ていました。日曜学校が終わると、家内と子供たちは、一緒に礼拝に出かけていきました。私にも、教会に行かないかという誘いがあり、たまには礼拝にも出席するようになっていました。

そして、家内が洗礼を受けた次の年に私も洗礼を受けることになりました。しかし、イエス様を信じただけ、形ばかりの悔い改めをしただけで、自己中心の考えは変わることなく、礼拝にもほとんど行きませんでした。

仕事のほうは本当に大変な毎日が続きましたが、それでも何とか時が過ぎていきました。本当はイエス様が助けてくださり、導いてくださっていたのだと思いますが、私は、イエス様に祈り求めることもなく、またイエス様の助けに感謝することもなく過ごしていました。出張所ができてから二年後にやっと一緒に働く人が与えられました。そして出張所の仕事も増やして行きながら、六人で仕事をするようになりました。私の仕事も、ほかの人と共有することができ、時間にも随分余裕ができました。それまでは、仕事が終わるとやり切ったという達成感が与えられていましたが、仕事を共有するようになるとやり遂げたという達成感はほとんど得られなくなり、仕事が楽しくなくなりました。何だか心の奥のほうに穴があいたような、燃え尽き症候群のような感じになってしまいました。夕方仕事が終わっても、まっすぐ家に帰るのではなく、何となく夜遅くまで時間をつぶしてから家に帰るようになっていました。その時間つぶしに、ほぼ毎日ゲームセンターに行くようになってしまいました。ゲームセンターでは、競馬ゲームをやっていました。高配当を狙い当たるとスカッとし、やったという達成感も得られますが、そんなことはなかなか起こりません。たま

の達成感を味わうためにコインがどんどんなくなっていき、コインを補充するためにお金が必要になっていきました。多い時には一晩で一万円使ってしまった時もありました。そのようにしていて、小遣いで足りるはずがありません。とうとうサラ金に手を出してしまいました。

伊勢崎へ転勤してから八年後に名古屋の本社への転勤が決まりました。

いろいろな事情があり、春日井市にある家内の実家に、家内の母親と一緒に住むことになりました。そしてそこから歩いて十分位のところにある春日井福音自由教会に行くようになりました。その教会では礼拝の前に子供たちのためのサッカー教室を開いていました。不思議なことに、そのサッカー教室のコーチをすることになりました。サッカー教室が終わった後に、子供たちと一緒に、毎週の礼拝に行くようになりました。しかし、私の自己中心は直っていませんでした。牧師先生のメッセージを聞いても、そのまま素直に受け入れるのではなく、自分で勝手に判断し、イエス様のみことばよりも自分の考えを優先させるようなものでした。

教会に行き始めてから七、八年後、家内が牧師先生の言動につまずいて、家族みんなで教会を離れることになりました。その教会にいた姉妹に紹介されて名古屋キリスト集会に導かれました。紹介してくださった姉妹は、私たちを紹介するとまるで役目が終わったかのように春日井の教会に戻っていきました。家内と子供たちは、すぐに集会に集うようになりました。しかし私は、教会にも集会にも集うことはできずに、しばらくは礼拝から遠ざかってしまいました。

会社で私は、本社工場の生産現場の設計を担当することになりました。しばらくは普通に通勤し、仕事が終わったらまっすぐ家に帰って行きました。五、六年たったある日突然、通勤途中で、もう少しで会社に着くというところまで来た時に、何故だか、今日は会社に行きたくないという思いが湧き起こってきてどうしてもその思いを止めることができなくなり、会社を休むことになってしまいました。家内には内緒でしたので家に帰る時間になるまで時間をつぶしてから帰りました。最初のうちは、喫茶店に二軒行けば、帰る時間まで時間をつぶすことができましたが、会社を休む日が段々多くなってくると、喫茶店だけでは時間をつぶすことが難しくなり、またゲームセンターに行くようになりました。ゲームセンターに行くようになるとお金が足りなくなり、またサラ金からお金を借りるようになってしまいました。何とかしなくてはと思い、病院の心療内科に行きましたが、先生が何か頼りなく思えて、このまま病院に通ってもこの生活は変えられないと勝手に思い込み、病院に行くのをやめてしまいました。

6人の証し

Unser HERR lebt

そんな時、家内からイザヤ書のみことばを聞かされ、集会に一緒に行こうと誘われました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。

（イザヤ　43・4）

私にとってその時の自分自身はとても嫌な存在でした。そんな私を赤の他人であり遠い昔の人であるイエス様が、何故「高価で尊い」と言ってくださっているのかがよくわかりませんでした。しかし、このみことばは何故か私の心に響き、深く残りました。集会の礼拝に集うことはできませんでしたが、「名古屋喜びの集い」にだけは行くことができました。

サラ金からお金を借りて利息を返済して、また借りて遊ぶ、という生活を繰り返していると、借入額の上

限の四百万円に近づきお金を借りることができなくなり、利息を返すこともできなくなりました。どうしようもなくなり、やっと家内に話をし、高知の両親からお金を借りてどうにか借金を返済することができました。しかし借金は返済することができたのですが、生活は変わっていなかったので、ゲームセンターに遊びに行き、また少しずつ借金が増えてゆき、返済することができなくなり、両親に借りて返すという繰り返しになってしまいました。そんなことが十年近く続きました。つらい時間でした。そんな時、サラ金から借金をすることができなくなるように、家内がサラ金のカードを捨てたらどうかと提案してきました。家内も子供たちも、そして集会の兄弟姉妹も祈っていてくださったのだと思います。自分ではどうすることもできませんでした。サラ金から借金をしないということは、会社にはまじめに行く、ゲームセンターには行かない、今の生活を変えるということになります。その時の私には、祈って御心（みこころ）に従うということはできませんでしたが、神様が導いてくださり、そうしようという決断をさせてくださったのだと思います。何とかサラ金のカードを破棄することができました。それ以降はサラ金から借金をすることはなくなりました。そしてその後、小遣いの範囲で何回かゲームセンターには行きましたが、そこでとてもいやな思いをさせられ、もう行きたくないと思わされて行かなくなりました。仕事に関しても普通に会社に行くことができるようになり、通勤途中で会社に行きたくないという思いが突然湧いてくることもなくなりました。その後定年退職し、今は小さな印刷会社に週四日勤務させていただいています。

「名古屋喜びの集い」に三回集った頃に、礼拝に行ってみないかと家内に誘われ、「あなたは高価で尊い」と言ってくださっている方のことが知りたくなり、少しずつ名古屋キリスト集会に集うようになりました。名古屋集会の兄弟姉妹は歓迎してくださいました。その中に新井兄弟もいらっしゃいました。しばらくして新井兄弟は天に召されました。その時にこれからの名古屋キリスト集会は大丈夫かと思わされましたが、そんな心配は必要ありませんでした。私が名古屋集会について祈っているとき、天からの声が私の頭の中で聞こえてきました。「新井兄弟のよう奉仕しなさい」という御声でした。その時には「とても無理です」とお答えしてしまいましたが、その後、「私にはできませんが、御心ならばそのように導いてください」と祈ることができるようになりました。

それからベック兄やいろいろな方のメッセージを聞いたり、いろいろな方と交わりを持たせていただくことにより、私の信仰生活も少しずつ成長しているように思わされています。主は私たちをいつも最善へと導いてくださっていると信じ、これからも主を見上げつつ、へりくだって歩んでいきたいと思わされています。

今橋 達男（いまはし たつお）
一九五二年　高知県須崎市安和（あわ）生まれ、
高知市立小高坂小学校、土佐中学校、土佐高校、
名古屋工業大学電気工学科卒
ゴールドキング㈱定年退職、㈱モリコー勤務
妻　由実子（ゆみこ）
長女　津久井 綾子（つくい あやこ）
長男　玄太（げんた）

主は、私の光、私の救い

近藤 南海子



南海子さん。ご主人の武夫さんと

イエス様を信じ救われてから、闇から光の道を備えられ、主を見上げる時に、平安を頂いてイエス様が共に歩んでくださることを覚え、感謝しています。

イエス様との出会い

二才年上の姉が中学生になった時、仙台のミッションスクールに通うようになりました。毎朝礼拝をしてから授業が始まったそうで、聖書の時間もあるということでした。そこで姉は神様を信じ、イエス様の救いをはっきり受け入れ、その時から家族の救いのために祈り始めたということです。

姉が時々、神様のことやイエス様のことを話しますと、私は、ふつうに進化論の世界観の中に生きていましたから、姉の言うことが別世界のように感じて反発を感じました。けれども姉は前向きで明るく思いやり深く生きているので、創造主なる神の存在を信じられる人に、半ば羨(うらや)ましさも感じ、本気に反論するなら私も聖書を読まなければという動機から少しずつ読んでいきました。しかしながら小説を読むようには読み進めることができなくなり、信じられない所が出て来ると放り出すことも忘れることもできないようになりました。

「五つのパンと二匹の魚」の奇蹟をはじめ、様々な不思議な話は見事に出来ている物語に思えるために、現実的ではないし、私の頭では理解できない事ばかりの中、イエス様の語ることばが心に刺さり留まって離れませんでした。特にマタイの福音書23章27、28節「忌(いま)わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。…あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです」というみことばで、私は自分が偽善の律法学者やパリサイ人の側の人間に思え、神が存在するなら見放された者かも知れないという思いもしました。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。（ヘブル　4・12）

ちょうどそのような折、近くの広場で米人宣教師によるキリスト教の天幕伝道集会が開かれ、娯楽があまりない時代でしたから妹や弟と興味半分で行ってみました。私は話の内容よりも宣教師さんが吹くトロンボーンの賛美歌に感動し帰って来ました。弟は翌日も出かけイエス様を信じました。

その後、私は神様のことを知りたくなり、毛糸店の二階で開かれている聖書集会へ行き、女性宣教師A・フォーマン先生にいろいろ質問しますと、言葉の問題もあって納得できる解答は得られませんでしたが、溢(あふ)れる笑顔と平安な姿にこの方のうちに神がおられ、守られているように思いました。

聖書を読んでいくと、ローマ人への手紙3章には人間の心の中の罪が書き出されていて、私も無関係ではないと思いました。いくら自分が良い人間のつもりでいたとしても、「義人はいない。ひとりもいない」（ローマ3・10）と書いてあり、人間の本質を知らされて、私は利己的な、自分中心の者と分かり、親に逆らったり、感謝もなく、高慢であり、高ぶる者であることに気付くばかりで自己嫌悪に陥りました。

悩んだ末に、それまで何度か聞いてきた話で、二千年前に人間の罪を赦すためにキリストが身代わりとなって十字架にかかって死なれたということを信じてみることにしました。また愛がない自分に気づき、人を傷つけても気づかないで過していたこと、等々、次から次と思い出されて良心の咎めを、ひとつひとつ十字架を思いながら、あれもこれもイエス様ごめんなさい、と謝っていくうちにイエス様が私の罪を全部背負ってくださり、犠牲となって代わりに死んでくださったことが身近に思われて来て、人にも謝ることが多くなり、イエス様の復活を信じることができてから、次第に、信仰による平安を得られるようになりました。イエス様のことを信じきれずに悩んでいる時、母は何故私が悩むのか、一緒に悩んでくれるうちに、母自身もイエス様を求め始め、そのうち下の妹、次に母、そして末の妹も信仰を持つようになりました。

フォーマン先生と共に伝道を始めていたH宣教師さんが、病気のため帰国しましたが、その際に診察に当たった父も福音に接する時となり、交わりもあり、クリスマスになると入院患者さんを集めて宣教師さんに頼んで話をしてもらったこともありました。後になって父は祈られていたことを知りました。

父は私たちの信仰を大切にしてくれ、からかったりもしましたが、忙しい仕事の合間をみていつの間にか内村鑑三の本を読んでおり、病院の待合室にも一冊置いてあることに気づきました。

そしてフォーマン宣教師も帰国したので、聖書についてもっと知りたかった私は、近くの教会へ行きました。けれども、その教会の牧師さんは聖書そのものを語らず、社会問題や政治の話を多く語り、聖書のみことばやイエス様の話は出てきませんでした。私はそこに集っているうちに信仰がどこかへ消え、やはり聖書とは言え、普通の書物と同等で、人間に大きな影響を与えたものであるけれど、思想か概念と考え、深入りするのはやめようと思い、教会へ行くのをやめました。

その頃、姉は大学生になっていて、阿佐ヶ谷の単立教会に通っており、牧師さんの話を手紙に書いて時々母に送って来ました。私もそれを読むと希望が与えられました。その中にあった「教会とはキリストのからだであり、有機体である」という言葉にいのちをかけた真剣さを覚え、私も再び信仰に確信を持ちたいと思いました。

大学入試と同時に上京して日曜日には姉に連れられてその教会に行き、牧師の話で私の思い違いに気づかされ、みことばで正されると平安が得られ、自分の判断よりも愛なる神様のご存在を信じ続けようという思いが強くなりました。牧師の話で心に残っていることは、「信仰生活は、みことばの学びと、祈りと、交わりで組み合わされ、どの一つを欠いても立ち行かなくなる」という言葉でした。またこの時、信仰の友が身近に与えられて、その方との交わりや祈り会に参加することで問題から解放されることが早まりました。

ある日のこと、山の手線の電車の中で後ろから私の名前を呼ぶ声がして振り返ると、何と十五、六年前にアメリカに帰国されたフォーマン先生だったのです。変らない笑顔に驚き、夢を見ているようでした。神様に守られ、祈られていたこと、愛なるイエス様が生きて働いておられることを実感し、励まされ、神様への思いが強められました。

6人の証し

家族を通しての導き

牧師の紹介で主人との結婚が与えられました。同じクリスチャン同志なので大体うまく行くだろうと考えていましたが、毎日の生活では自己中心の罪が示されて砕かれることが多くありました。ときに気まずくなった関係を主が修復してくださり、神様のあわれみによってこれ迄支えられてきました。

二人の娘が与えられて、子育ての最中は子供は神様のものなのに自分の所有物のように思ってしまい、ゆだねきれずに砕かれました。

特に長女が喘息になり、呼吸が困難になると私は死の恐れに囚われてしまい、ただ辛い時が過ぎるのを祈りながら実際よりも長い時間に感じ過ごしました。

主人の仕事で名古屋に転勤になりましたが、名古屋には知り合いがおらず、不安でした。祈るとマタイの福音書28章20節後半「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」のみことばが与えられ、安心して名古屋での生活を始めることができました。キリスト教の幼稚園も与えられて二人の娘は年中組、年少組に入りました。幼稚園の先生方は毎日園児たちのために祈ってくださり感謝でした。長女の喘息では薬が増える一方になり、玄米自然食に変えたところ、改善はありましたが、死の恐れを乗り越えることはできませんでした。

今池にキリスト教書店があり、そこで『実を結ぶ命』(G・H・ベック著)という本に目が留まり、買い求めて読んでみました。娘さんのリンデさんが病の中で復活のイエス様と結びついた信仰をもって天に召されたその姿に心打たれ、圧倒されました。また、それまでの私の天国への思いは貧弱なものでしたが、この本を通してイエス様が共におられる天国のすばらしさも感じられて、天国とは、主がおられて、何よりも、主と共に大安心で、感謝に満ち溢れた場所という確信が与えられました。たとえ死んだとしても天国に行けるのであれば心配することなどない、神に背いて来たことを悔い改めて救われることが最も重要なのだと、急に思いが変えられました。それ以来、死の恐怖がとり去られて、何よりもまず子供たちの魂が救いに導かれますよう祈るようになりました。

長女は高校卒業する頃から喘息で悩まされることはなくなり感謝です。これからも娘たちの救いのために、最善の時が来ますよう祈っています。

『実を結ぶ命』を読んだ後に、母から証し集『光よあれ』(第四集)が送られてきました。母がクリスチャンの友人から頂き、とても良かったので読んでみたら、とのことでした。生き生きとした信仰者のお証しに大変励まされ、どこの発行なのか見てみると、リンデさんが集っていた所と同じ吉祥寺キリスト集会でしたので偶然さに驚き、また名古屋キリスト集会があることもわかり、その家庭集会に導かれました。

初めてベック宣教師とお会いした時は、何か光の塊のように見え、急にヨハネ8章12節のみことば「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです」が思い出され、またその集会もいのちが溢れているように感じました。

私は、それから集会の方へ行っていましたが、四か月ほど経った頃、主人が東京本社へ転勤と決まりました。私たち家族は調布の家に戻り、それからは吉祥寺キリスト集会の礼拝や家庭集会に参加して、主の働きを身近に見聞きし、家族に与えられた悩みのために祈り会の姉妹方と共に祈り合い、励まされ、イエス様に支えられて過ごして来られたことは感謝でした。また、子供たちや孫たちが救われ再臨の主にお会いできる本当の希望を持つことができますよう祈っています。

両親の救い

父は幼い頃、鹿児島で伯母に連れられ日曜学校に行ったことがあったという話しでしたが、その後、人

生の所々で信仰者に出会い、多くの方々に祈られていたことを知ることができました。そして父は八十五才で医師を辞めた後、仙台に移り住んでからは日曜日に高田兄姉宅で持たれていた集会に母と出席するようになり、「沖縄喜びの集い」にも仙台集会の方々と共に参加しました。一九九四年八十九才で父が召された時、母は父が救われていたのかどうか悩みましたが、ベックさんから、「沖縄喜びの集い」の時に、一緒に祈ったことを知らされて、心から安心しました。

葬儀に際しては反対もありましたが、聖書に則った葬儀に導かれました。父の仕事の関係上、医療関係の方や大勢の方々が列席くださいました。

また、喪主である兄の関係で大学の先生方も多くお出でくださり、広い葬儀場で、ベックさんによって福音が語られました。

数年後、その時の録音テープを聴いて、ご夫婦共に信仰に導かれたという方が仙台キリスト集会で偶然に私の隣の席に座られ、話しを聞かされて、驚きつつ感謝したことでした。

母は父が召された後はひとりで暮らし、日曜日には毎週欠かさず兄が車で母を迎えに行き集会まで送ってくれました。週の半ばには姉妹方と家で祈り会が持たれました。みことばを毛筆で書くのを趣味としていましたが、ある日、胸の苦しみに襲われ、筆が持てなくなり、詩篇23篇をとぎれとぎれ声に出した後、愛唱歌の『日々の歌』111番「間もなく来られる主イエス」を口ずさみ、イエス様に感謝した後、介護に当たっていた妹の腕の中で天に召されました。二〇一二年七月、九十七才でした。

仙台への転居

二〇二二年七月に私たち夫婦は両親が住んでいた仙台のマンションの部屋に引越して来ました。ふたりとも長年の足の痛みで日常生活が停滞気味でしたが、階段のない生活で痛みが軽減して、夫の半介護の生活のためには助かり感謝しています。

日曜日には仙台集会に集会の兄弟姉妹に車に乗せて頂いて集うことができ、また祈り会にも行くことができ感謝です。仙台集会は小さな集会ですが、主の恵み豊かで、さらに新しい方が導かれますようお祈りしています。

仙台へ来て子供たち家族とは遠く離れてしまいましたが、イエス様の救いを受け入れて共に主のご再臨の希望を持つことができますよう、毎日祈っています。

夫　武夫
長女家族、次女家族

近藤 南海子（こんどう なみこ）
一九四三年五月 中国淮南市生まれ
塩釜市立第三小、仙台市立第二中、
宮城県立第一女子高、日本大学文理学部独文科卒業、
日本点字図書館勤務を経て結婚

6人の証し

Unser HERR lebt

いのちなるキリスト

小久保 智子



智子さん

主のことを思うと「ありがたい」のひと言につきます。

おお、クリスチャンよ。もしあなたが悔い改め、神を信じていることを知っている、それだけで、救いを確信していると満足していたなら、私はあなたに、このようなことは、永遠のいのちのほんのはじまりにすぎないということを覚えていただきたいのです。

A・マーレー著『いのちなるキリスト』より

このアンドリュー・マーレーのことばを読み、救われていることだけに甘んじている私は、ドキリとします。また、ある聖日の礼拝で、祈る兄弟の引用された次のみことばが心に響きました。

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。（1コリント 2・2）

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。（ピリピ 3・8）

かつて、「諸集会」という別の集いにいた頃の私が、当時、そうなりたいと憧れていたみことばです。

主に導かれて半世紀、未だ、脇の甘い「ごっこ遊び」をしているような者です。この地上をキリスト者の端くれとして歩んできた者に、今回、振り返りの機会を与えてくださった主に、そしてキリストにある集会に感謝します。風化していく記憶をたどりながら証しをさせていただきます。

6人の証し

Unser HERR lebt

私は昭和三十一年六月一日、父安達一夫、母たけの次女として生を受けました。四歳上に、長女、小口孝子がいます。

子どもの頃

私が物心ついた時には、父はミシンやオルガンを販売するセールスマンでした。定職、定収入はなく、国民健康保険にも加入できませんでした。

それでも、低所得者向けの大阪市公営住宅に、なんとか補欠で入居できました。それまでは間借りだったので、平屋で連棟、マッチ箱のような空間と小さな庭でも、「気兼ねしなくてよい」と母は喜んでいました。この当時のことを母は、大海にボートを浮かべたような日々だったと言っていました。

主が私たち家族を養ってくださっていたことを感謝します。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

（マタイ　6・26）

乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。

（ピリピ　4・11）

私が小学校一年生の時、母は傘の骨を加工する収入のよい内職を紹介されました。家に小さな機械を置いて、一日中、油まみれになって重労働の日々が始まりましたが、とうとう過労で母は床に伏してしまいました。衰弱していくその姿に死を感じ、怯えていたことを思い出します。その後も母は病弱でしたが、七十四歳まで生かされたことは感謝です。

私は小学校入学時から、父の手ほどきを受け、学校から選抜され書道展で入賞するようになりました。父は自宅で週末、寺子屋形式で習字を教えるようにもなりました。高学年になると私でも内職の一助になるようで、下校してから精力的に手伝いましたが五年生の二、三学期に風邪をこじらせ、長期欠席をしてしまいました。痰がからむと呼吸ができない苦しさに悩まされ、死んだように無意識状態になれば楽になるだろうと子供なりに考え、努めて眠るようにしました。翌朝、目が覚めないかも知れないと幾度も思いましたが、苦しさのほうが大きかったようで恐怖は感じませんでした。生まれつき気管支が弱いことがわかり、今でも風邪は要注意です。

主との出会い

私が主に意識してお出会いしたのは、高校二年生の時です。「聖書通信講座募集案内」のハガキを町中で受け取り、受講無料に惹かれて申し込みました。新約、旧約の聖書の世界を知るうちに、学生サークルに誘われて「諸集会」に集うようになりました。

あるバイブルキャンプに参加した二日目の朝、学生サークルで歌っていたゴスペルフォーク・ヒット集『友よ歌おう』の中の「松原湖畔にて」のメロディが脳裏をよぎり、部屋で一人で祈り、イエス様について行こうと決心しました。そして二十歳の時、バプテスマ（洗礼）を受けました。

松原湖畔にて　朝　イエスさまと　出逢いました
愛にみちた　眼差しで　シャロームといわれました
イエスさまを　知った喜びは　忘れられない
イエスさまのことを　歌わずには　いられない

「松原湖畔にて」より

高校卒業後は教育公務員（実習助手）になり、両親が病気の時に味わった苦い体験から二人を私の扶養家族に入れました。二年後、二部の三年制の短大に入学、教員免許を取得し、さらに図書館関係の資格を通信教育で取得しました。職場から近かったので、二部の大阪教育大五年生課程三年次に編入。さらに大学院に進む道が開かれ、学問の空気を吸う経験をしました。と言っても、昼の間は給与労働があるので大変でしたが、今思えば自己満足の経験をしただけのようにも思います。神の御心と関わりなく立てる人間の計画は虚しくて、本当に大切な知識は「主を恐れること」でした。

エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば。
空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。

（伝道者　1・1、2）

主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。

（箴言　1・7）

6人の証し

Unser HERR lebt

父の召天

父は、私が二十三歳で短大を卒業する直前の二月にがんで亡くなりました。まだ体力のある頃、当時私が集っていた「諸集会」から色紙に聖書のみことばを書いてほしいと度々頼まれ、父は親心で書いてくれていました。一度、どのみことばだったかは覚えていませんが、父の心に響いたようで「いいことばやな」と言ったことがありました。

亡くなる少し前、ヨハネ三章十六節を全紙に書いてほしいと頼まれました。甲状腺がんの手術、放射線治療の痛みで、「書けない」と涙する父の姿を初めて見ました。私は父に無理強いして申し訳なかったという感情と、なんと自分勝手な悪い娘なのかと罪を示されました。父は召される直前、母に苦労をかけたことを侘びました。私はすべて「イエス様だよ」と言うのが精いっぱいでした。「わかっている」と返事をした後、昏睡状態になりそのまま召されました。

わたしの弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。」

（マタイ　10・42）

父の葬儀は「迷いもなく」仏式で行い、私は偶像にも手を合わせてしまいました。その時は自覚がなかったのですが、後になって、集会の兄弟から偶像を拝むことは罪であると教えられました。

あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるもの　でも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拝んではならない。

（出エジプト　20・4、5）

こうした中で、その集会にいることが苦しくなり、

集会から出ることにしました。去る前に、父の最後に書いたみことばを作品にして、集会に届け「諸集会」を出ました。

悩みながら近隣の三件の教会に、今その時の自分の心境を手紙にして助けを求めました。母校の中学校近くの教会は、私が中学生の頃は小さな建物で、宣教師がいて人があふれていると聞いていたのでそこを訪ねました。行ってみると、その教会の建物は大きくなっていましたが、献金問題などがきっかけで閑散とした状態になっており、暗い教会生活が始まりました。母も一度、見に行きましたが、「私は家で礼拝する」と毎日、朝から晩まで聖書を楽しんでいました。

母の召天と神戸キリスト集会への導き

父が亡くなる一年前ぐらいだったと思います。母は甲状腺の炎症が引き起こす橋本病になり、大学病院を受診することになりました。病院へ行く沿線途中に、

私が居づらくなって離れた「諸集会」に、ベックさんが二、三か月に一度来阪されていました。母はそこへ「病院へ行くから」と言って父に気兼ねなく外出できました。いろいろと悩んでいた母は、必死にイエス様を求めイエス様に導かれていき救われました。

父が亡くなり、まもなくして家にあった仏壇は「神様が喜ばれないから」と母と二人で潰しました。

母は七十二歳の時、胃がんになりました。そして私たち夫婦が大阪から西宮に転居するとき、母も一緒に引っ越してきました。母はその時すでに葬儀について「花一輪で」と遺言を書いていました。

西宮に来て私たちが新しく通い始めた教会の本棚に、キリスト集会の証し集『光よあれ』（第四集）が置いてありました。

懐かしいベックさんの名前に目がとまり、借りて帰ると、弱っていた母が一挙に読み、「集会に戻ろう」と

言い出したのです。その頃、教会では牧師と信徒がもめていて、そこを出る「時」だと思いました。ただ、私の信仰がついていけるかと不安でした。

そうした中、「神戸キリスト集会」に私ひとりで初めて行ってみました。礼拝の讃美で胸が一杯になり、ここに集いたいと思いました。母が召されたあと、「花一輪で」という遺言をベックさんにお見せして、記念会を神戸キリスト集会で行っていただきました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。（マタイ　7・7）

結婚、そして主人を御国へ

私は三十歳前に職場の方を通じて主人と出会いました。夫になる人には主イエス様のことを伝えなくてはいけないという強迫観念に近いものがあり、祈りながらお付き合いする中で、主人も主イエス様を信じ救われ、一九八五年八月十日、結婚生活が始まりました。

主人は滴礼（てきれい）を受けておりましたが、震災後、自ら全身水に浸かる浸礼を受けたいとの思いが起こされ、改めて受洗しました。

その主人も、二〇一三年十一月十四日十七時十七分、天国に戻りました。私は、心の中が整理できず、「アーメン」と言えるまでに時間がかかりました。主人は、六十歳の退職後、肺がんがわかりました。自然食の店主に、波動医学の東京の医師を紹介してもらい、三か月ごとに受診、また一般病院で経過観察のためレントゲンを三か月ごとに撮っていました。

最後の食卓となった夕食にステーキを美味しく食べ、初めて一般病院で出された錠剤を一錠だけ飲んで休みました。夜中二時過ぎ、突然「呼吸ができない。救急車を呼んでほしい」と訴え緊急入院となりました。主人は酸素マスクをつけられましたが、まさかすぐに召されるとは思ってもいませんでした。入院してわずか数日で主人との別れ、私はこのことを主から素直には受けとれませんでした。

私は、長い間、あの一錠が頭の片隅にありました。しかし、ある時、神様が造られたとしか言いようのない人のいのちの不思議さを思いました。次のみことばが、私に光を与えてくれました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。（伝道者　3・1）

今は主人と天国で再会することを楽しみにしています。

まことの礼拝へ

ある姉妹から、A・P・ギブス著の『礼拝』という本を頂きました。見たことのある表紙に、かつて母に頼まれ購入していた本であるのに気づきました。その本棚の横にもう一冊、主人も読んでいたようです。

私は長い間、礼拝へはあたかもお参りにいくようにただ集うだけの者でした。けれども、やっと、聖日は「主の日」、一週間が新しく始まる日と思えるように変えられました。

神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。（創世記　2・3）

神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」（ヨハネ　4・24）

姉、小口孝子は「大阪神戸喜びの集い」で受洗の恵みにあずかりました。福音は聞いていましたが、突然「洗礼を受けたい」と連絡があり、主人が姉のご主人と電話で話し、姉の洗礼に賛成しておられることもわかり二〇〇九年に実現しました。いま姉は、日々、主に愛され訓練の途上です。

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・11）

このみことばに、姉も「アーメン」と言える日を祈っています。

ここまで証しをまとめて、主がこれまで導いてくださった一連の流れに感謝しました。また、冒頭のマーレーのことばにドキリとしたように、私の自分中心の信仰に光をあててくださったことも恵みでした。「私のうちにおられる主」を知らず、主を求めることもしなかった自分がいました。残されている地上の時間、これからはいつも「私のうちにおられる主」の先導と伴走で完走したいと願っております。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。（マタイ　7・7）

6人の証し

小久保 智子（こくぼ ともこ）
一九五六年　大阪市生まれ
大阪府立東住吉高校、大阪基督教短期大学（二部）、
大阪教育大学（二部）、同大学院（二部）卒、
大阪府藤井寺高校、今宮工業高校、天王寺高校
（定時制）、桜塚高校にて実習助手、
大阪府立刀根山支援学校、聾学校講師

夫　到（いたる）　二〇一三年十一月十四日召天



あなたが私とともにおられますから

増田 司



司さん。妻の喜子さんと

生い立ちと救い

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結びます。

（ヘブル　12・11）

私は一九五八年十月十一日、埼玉県川越市の田畑が広がる農村部で、会社員夫婦の四人兄弟の第一子として生まれ、祖父母によって自由に伸び伸びと育てられました。また、六十五年も前の田舎ですから、祖父母、父母共に八百万の神や仏を信じて家の内外に祭っていましたので、私自身も小さい頃から人間を超える存在を疑ったこともありませんでした。

一歳の冬、私は蓋いが外れていた掘り炬燵の中で遊んでいて、燃える炭の中に右手から落ちました。この右手に酷いケロイドと親指が十分に開かないという少しの不自由さが残りましたが、今から思えばそれだけで済んだことが奇跡でした。ただ、赤く醜く引きつったケロイドは中学生くらいまではとても目立ち、これを人目にさらすことが嫌で、いつも右手をポケットに突っ込んでいました。

小学校五年生の暮れ、インフルエンザに罹り、そのウィルスが膵臓に入り込んで、若年性糖尿病になりました。正月から一か月半にわたり、大人の内科病棟に入院します。この時に病や老衰、死に対する人間の無力さを見てしまいました。この病院での様々な体験は、私自身が思っている以上に私の心に大きな虚無感を植え付けたと思います。病状は好転せず、ご近所の方に紹介された東京大学附属病院に入院します。この時から毎日のインスリン注射による治療が必要となりました。右手のケロイドやヘルニア、そしてこの糖尿病が負い目となり、思春期も重なって、この頃から内向的で世の中を虚無的に眺める、またあきらめの気持ちが強い性格になりました。

中学生になると小学校時代には沢山いた友人たちから自ら離れ、本の世界に逃げ込むようにもなりました。人を遠ざけ、友だちを作らなかった中学から高校にかけては、私の暗黒の時代です。

空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。
日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。

（伝道者 1・2、3）

高校生になった頃だったと思います。東大病院の主治医が変わりました。この集会に集っておられたOさんです。高校二年か三年の頃、このO先生から糖尿病患者には向いていない仕事についてのお話が、さり気なくありました。糖尿病には低血糖という厄介な発作があります。最悪の場合、意識を失う状態にもなります。また生活上の大きなストレスや不規則な生活も病

気には良くありません。先生のお話は当然のことでしたが、自分の夢見ていた職業はことごとくあきらめざるをえませんでした。この頃美術部に入り、描くことへの興味が深まります。半分は妥協でしたが、将来は美術の教師にでもなって、のんびりと絵を描きながら過ごそうと考え、千葉市の教育学部のある大学を受験しました。そして、一九八二年に千葉市の中学校の美術科の教員に採用されました。

一九八六年の秋、喜子と結婚します。その翌年、出身地埼玉県の教員採用試験を再受験し、合格することが出来、喜子と共に埼玉県に戻りました。喜子は私の身体のことや二人の将来を非常に心配し、積極的に仕事を探し、働いていました。

『主は生きておられる』23号に私たちの結婚生活について、喜子が書いています。私は、結婚後、暴言と暴力で喜子を苦しめ、喜子が返す鋭い言葉と冷たい視線に私も苦しみ、また、私自身の職場でも試練が与えられました。救われる前の数年間は仕事場にも家にも、私には本当にどこにも安らぎの場所はなく、私はそれを外に求めて、喜子にとても悲しい思いをさせました。このまま喜子と別れて仕事も辞め、一人で生きて行く自分のわびしい姿が見えるようでした。死んでしまおうかとも考えていました。姉妹の証しにもあるように、どうしようもない夫だったのです。

私の心が苦しみ、私のうちなる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。（詩篇　73・21、22）

二〇〇一年九月、この無残な苦しみの中で、喜子が初めて伺った上福岡家庭集会を通して、何が何だかわからぬうちに喜子の中の何かが変えられ、救われたのでした。

——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——

…それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。（エペソ　2・5、8）

日曜日の礼拝に集い始めた喜子を、新興宗教ではないかと心配した私は、集会の様子を探るために送迎し、川越キリスト集会の会場にも入るようになりました。礼拝での祈りや賛美、メッセージはちんぷんかんぷんでしたし全く興味もありませんでしたが、会場にいる間、なぜか疲れた心が安らぎ、荒んだ心も和らぎ、集会の間ずっとうつらうつらしていました。また、私の職場の親しい同僚の奥様が、その集会に集う方々の中にいらっしゃることも分かり、本当に驚きました。

この年二〇〇一年の十一月、長野県御代田町にある西軽井沢国際福音センターという所でキリスト集会の大きな行事があると聞いた私は、喜子姉妹（以後「姉妹」と付けさせていただきます）を誘いました。ともにイエス様を信じるドイツの兄弟や姉妹たちも参加された「喜びの集い」でした。雨上がりの重い灰色の空の下、濡れて黄色く輝くカラマツと真っ黒な土の対比がとても美しく、私の灰色の心にも深く染みました。

その日の夕方、ある方がベック宣教師と喜子姉妹の福音センターでの交わりを整えてくださっていたのですが、勘違いした私も二階のベックさんのお部屋に上がりこんでいました。お話しの中で、ベックさんはまるで私に語られるように「羊は弱い動物で、羊飼いがいなければ迷ってしまうんだよ」、「もう頑張らなくていいんだよ」と優しく仰いました。もうダメでした。これまで一人で突っ張ってきた私は、そんな言葉を一度もかけられたことがありませんでした。恥ずかしいのですが、涙と嗚咽が止まりませんでした。

…まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、か

6人の証し

わいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。…父親はしもべたちに言った。…「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」（ルカ　15・20、22、24）

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。（詩篇　51・17）

翌日、コンサートも終わり、さて帰ろうと二人で福音センターの南側の通路を出口に向かって歩いていると、「増田君、増田君！」と私を呼ぶ声がします。見ると、O先生と奥様が一生懸命に通路に出てこようとしています。私は何が何だかわからず固まってしまいました。お二人がこの集会に以前から集っておられ、私のことを祈ってくださっていたことを知り、それまでの奇跡のような出来事の連続に「もうダメだ。神様はいる。この神様からは絶対逃げられない」と、本当に思い知らされました。と同時に、私のすべてを知っておられ、こんなどうしようもない者が信頼し、ゆだねてよい方がいるのだと直感し、心から安心したことを覚えています。私が四十二歳の時です。その時はまだ知りませんでしたが、翌年の春、O先生は東大病院を退職され、岩手県の水沢の病院に移ることになっていらしたので、お会いするには本当にギリギリのチャンスでもあったのです。

まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことがないもの、耳が聞いたことがないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」（1コリント　2・9）

あなたの神、主が、この四十年の間、荒野（あらの）であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。…この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかった。（申命記　8・2、4）

父の病と死、主のあわれみ

あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。（ピリピ　1・29）

二〇一六年から翌年の冬にかけて、増田家は大きく動かされました。

十一月十六日朝、私の父が脳出血で倒れ、通院していた埼玉医科大附属国際医療センターに救急搬送されました。十二月半ば、左半身不随、脳出血から来る高次脳機能障害による認知症も見られた父は、実家に近い川越のリハビリ病院に転院し、六か月間のリハビリを受けます。その後、特別養護老人ホームで八か月を過ごします。そして二〇一八年一月三十日、父は誤嚥性（ごえんせい）肺炎（はいえん）で亡くなりました。

この一年五か月は、集会の兄弟姉妹たちの祈りに支えられた、主の憐みと恵みに満ちた時でもありました。

まず、父が倒れる直前の十月に、私たち夫婦両家の両親が、四人共元気な状態で最後に会えました。また、父は脳出血の初期治療を、最新の素晴らしい技術を持つ病院で受けられました。

ところで、成績が良く高校時代にはプロからスカウトが来たほどに野球で活躍した父は、私の幼い頃はあこがれの存在でしたが、私が思春期になった頃からは、いわゆる「そりが合わない」存在でした。バリバリ理数系の父に対し、とことん文系の私。物事の最善を考え

断定的に物言う父を、「人には色々な考え方や感じ方がある」と考える私には信じられませんでした。結婚後は、実家にあまり寄りつかず、話が合う義父の所ばかりに泊まりに行っていました。

ところが、父の倒れた日からこの関係が大きく変わったのです。

私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。（詩篇　139・14）

倒れた父は救急車を呼ぶ前に、まず、私を呼ぶように母に言いました。私の顔を見た父は安心し、私のすべての指示に従ってくれました。父の病状が落ち着き、リハビリ病院に移った頃からは、できる限り父を見舞い、たくさんのことを話すようになりました。昔のことを話し、「そんなこともあったね」と互いに笑い、涙ぐみ、少し歯車がずれてしまった八十五歳の父が夢見る新しい事業のことを話します。明日の仕事のことを考え、私が帰ろうとすると「俺も一緒に帰る」と言い張り、機嫌を悪くします。しかし私は、それを振り切るように背中を向けて帰るのです。父が今日も無事だったという安堵と、子の義務を果たしたという冷めた思い、そしてそこに残される父の寂しい気持ちへの理解がせめぎ合います。本当に自分には愛などないことを思い知らされました。自分の家に心から帰りたがっていた父の気持ちに、結局は沿うことができませんでした。先程、「兄弟姉妹の祈りに支えられた」と書きました。それはもちろん父のこともそうですが、私自身が支えられていたということでもあります。

私は、私のうち、すなわち私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。…私は、ほんとうにみじめな人間です。（ローマ　7・18、24）

父が倒れたことで、日ごろ疎遠だった妹や弟たちとも連絡を取り合うようになりました。これもまたありがたく、感謝な事でした。

我が家は毎年、正月には家族皆で集まることになっていましたので、二〇一八年の一月三日も、特別養護老人ホームから許可をもらい、父を連れて実家に帰りました。でもこの時に、父の元気がないことに皆が気づきました。一月半ば、父が「ふとんが重い」と言うのを聞いて、母は父の死期が近いことを悟りました。

一月三十日午前中に、母が父を見舞いました。母が「お父さんと結婚出来て、本当に幸せだったよ。ありがとうね」と言うと、父は母の手をぎゅっと握り締めて離さなかったそうです。午後、宇都宮の妹や、近所に住む従兄が見舞った時には眠っていたとか。

その日の二十二時四十五分頃、介護士さんが見回った時には、父の呼吸は止まっていたそうです。父が召

6人の証し

Unser HERR lebt

された場には、残念ながら家族の誰も立ち会えませんでしたが、全てが平安に満たされていました。母から連絡をもらった私たち夫婦が母を車で拾い、施設に着いたのは二十三時過ぎ、痩せこけてはいましたが、父の身体には未だ温もりがあり、死の実感が乏しかったです。

父は生前、戒名を欲しがっていたらしく、故人の遺志を尊重して通夜と葬儀は仏式で執り行われました。喪主を母から頼まれたのですが、私は信仰を理由に断りましたところ、葬儀での親族代表の挨拶を頼まれました。この挨拶では父の遺体を背中にして、聖書のみことばをいくつか引用し、父が今は天国で大好きだった祖母や従兄と再び会い、喜び、安らいでいること確信していると話しました。その途中、母は、私がみことばを引用する度に私の話を止めさせようと立ち上がりました。その時は辛い思いをさせているという母への配慮も重なり、かなり落ち込みましたが、その私の様子

を見て、喜子姉妹が何度も何度も励ましてくれました。そして式の翌日、近所の方がよい挨拶だったと言ってくださったことは、本当に豊かな主なる神様の慰めでした。

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たからです。

（マタイ　10・34、35）

喜子姉妹を備えてくださった主への感謝

喜子姉妹が私の救われる機会となったことも勿論ですが、日常の生活の中で「主」の存在を忘れないようにといつも示してくれるのが、伴侶である喜子姉妹です。喜子姉妹が救われてから一年後に、私自身に糖尿病性腎症が与えられました。今まではカロリー制限だけで済んでいた食事療法に、塩分や蛋白質の制限も加わり、カリウムなどへの配慮もしなければなりません。「ブラック」と呼ばれる中学校で働きながら、一人でこれを計算することは私にはできませんでした。仕事を辞めた喜子姉妹は、この食事についての勉強をゼロから始め、私の生活を支えてくれています。この二十一年程の間につけていた献立表は厚いファイルに四冊、献立の計算メモは小さなノートに二十五冊以上に及びます。主が備えてくださったこの助け手の力に支えられて、私の病の様々な数値も大きくは悪化することもなく、日々を過ごせていることを、主に感謝しています。

ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。…

もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。

（伝道者　4・9、10、12）

最後に、主に感謝して、大好きなみことばを二つ引用して終わります。

それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

（ローマ　5・3〜5）

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。

（伝道者　3・11）

増田 司（ますだ つかさ）
川越市立霞が関中学校、埼玉県立川越高校、
千葉大学教育学部卒業
中学校美術科教諭として千葉県、埼玉県で勤務し、
現在、入間郡三芳町で美術科非常勤講師

妻　喜子（よしこ）

イエス様が愛し導いてくださる

古田 桐子

主は、私を救ってくださる。私たちの生きている日々の間、主の宮で琴をかなでよう。（イザヤ　38・20）



桐子さん（前列右）。祖母・鶴子さん（中央）、
叔母・康子さん（前列左）、弟・哲朗さん一家（後列）

私は熊本で生まれ、父母、弟の四人家族で育ちました。両親は喧嘩が多く、父は週に三日くらいしか家に帰らない状態でした。家にいても、父はどこか心がよそに向いているような印象でした。母は頼るものを探し求め、私が小学四年の時に単立の教会に導かれました。

私と弟は、日曜学校へ通うようになり、学校や家庭のほかに居場所が与えられ、学校の成績や友人関係とは違う価値観があることを知りました。特に日曜学校で習った子供の賛美はいつも心に浮かんで、イエス様を思い浮かべることができました。学校でいじめられたり、病気をしたりしたときは、年上の教会の方々が祈ってくださり、平安な気持ちになりました。毎日母と泣きながら祈る日々が続きましたが、ある日、体育館の裏でいじめられている最中に大きな野良犬が現われていじめが中断しました。「あ、イエス様だ」と感じました。いじめは中学一年までありましたが、そのことをきっかけに、イエス様を心から信じ、洗礼に導かれました。

その後、父も教会に導かれ、「イエス様」という共通語ができました。しばらく家族で教会へ集っていたのですが、単身赴任を機に父は教会から離れていきました。

私は山梨の大学に進学が決まり、イエス様は教会を通じてクリスチャンの先輩が住むアパートを用意してくださいました。私は先輩と一緒に近くの教会へ集っていたのですが、奏楽をすることになり、上手に弾けず、負担になって教会から遠ざかってしまいました。祈ることもしませんでした。人のせいにして勝手にイエス様から離れてしまいました。

その頃、教会で悩むようになっていた母が、教会に置いてあったキリスト集会の証し集『光よあれ』を読んで、吉祥寺キリスト集会のことを知り、夏休み、一緒に吉祥寺の礼拝に参加しました。みことばと祈りと賛美のシンプルな礼拝に驚きました。母はとても喜んでいました。その後イエス様は、熊本でも集会を起こしてくださり、母は教会から集会へ移りました。

一方、山梨で大学生活を送っていた私は、あっという間に暗やみの生活に転落していきました。自由気ままに暮らし、思うようにいかないことがあると、この世の楽しみで気を紛らわせていました。誘われて電車をキセル乗車しようとしたり、占いに行ったりしたこともありました。罪を犯していることに鈍感になっていました。イエス様が悲しまれていることなど全くお構いなしでした。

むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。（ヨナ　2・8）

6人の証し

主はこう仰せられる。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。

（エレミヤ　17・5、6）

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎（とが）が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

（イザヤ　59・1、2）

教員採用試験に落ちてしまった私は、卒業後熊本に戻り、母と一緒にキリスト集会に集うようになりました。はじめは集会で語られるメッセージの内容が理解できませんでしたが、徐々に、メッセージで語られた言葉やお証しを通して、自分の肉の性質を見せられ、罪を悔い改めるようにと、みことばが迫ってくるように感じました。また、メッセージや集会の皆さんとのお交わりを通して、聖書が教えている「秩序」があることを知りました。そして特に、私の父に対する言動が、間違っていることに気づかされました。

あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。

（出エジプト　20・12）

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。

（ローマ　13・1、2）

再び家族と暮らし、群れの中に入れられたことは大きな憐れみでした。集会の皆さんとの交わりの中で、間違いを気づかされ、落ち込むこともありますが、そんな私をイエス様はご存知で、日々新たにしてくださる、という希望と喜びをいただくことができました。家族や集会の皆さんの祈りがあったのだと思います。

一九九二年、ドイツの喜びの集いに参加して、周りの人が主を喜ぶように変えられていく姿を目の当たりにして、共にイエス様を賛美する機会をいただきました。「ああ、これから自分は大丈夫だ」と喜んでいた矢先に職場（小学校）でいじめの問題を与えられ、どうしたらよいかわからず、自分には何もできないことを知らされました。毎日泣いて周りの先生方に解決していただきました。学校で働く自信がなくなり、教員採用試験を受けるのをやめて、歯科技工の学校へ通いました。歯科技工士として五年間働きましたが、長時間労働で体がもたず、再びリハビリの勉強をして作業療法士になりました。

二〇〇六年十二月に祖父が天に召されました。祖父は一九九五年に大けがをしてから長い療養・闘病生活を送る中で、天国への切符を受け取っていました。頑固だった祖父が、穏やかに平安に天国へ旅立ったのを見届けることができ、寂しいけど、感謝な気持ちで一杯になりました。祖父の召天式をきっかけに、イエス様から離れていた父が、集会に導かれました。父はいつのころからか、よく話をするようになりました。「こんな人だったのか？」と今更ながら驚くと同時に、「ああ、やっと父は自分の家に帰って来ることができたのだな」と思いました。

二〇〇七年四月、私は精神科病院に就職しました。それまで、仕事を辞めるたびに「こんな自分でよいのだろうか」と悩み、イエス様に尋ねました。「イエス様は、私が何をするかを見ておられるのではなく、どこを向いているのかを見ておられる」とある集会の方

6人の証し

Unser HERR lebt

に言われ、イエス様が求めておられるのは、何をしていても、イエス様と共に歩むことなのだと、気づかされました。わがままな歩みをしてきましたが、イエス様がそれを赦し、そのうえで必要な方と合わせてくださり、ご計画を成し遂げてくださると思うと平安です。置かれた場所や出会う人、それぞれに主のご計画があるのだと思うと、厳粛な気持ちになります。

病院では宗教活動は禁止されています。そんな中で、患者さんを車に乗せて移動中、信仰について尋ねられ、イエス様の話をする機会が与えられました。患者さんの中には、病気と経済的な不安、孤独で生きる希望を失い、突然亡くなる方がいます。「この時が最後かもしれない」と思って向き合うようにと示されています。

イエス様からの宿題

イエス様は、ふとした瞬間に、昔犯した罪のことや、自分のせいで人を躓かせたことを思い起こさせ、悔い改めに導いてくださいます。いじめられた経験のある自分自身も、実は、いじめの張本人でした。昔、年下の女の子に、強く言って泣かせたことがありました。その女の子とはずっと会えず、いつか謝ることができるように祈っています。

また、大学時代にＮＨＫの受信料を払わずに過ごした時期がありました。だんだんそのことが気になって心が重たくなってきて、どうしたらよいか祈り、電話して問い合わせたところ、さかのぼって支払いすることは難しいと言われ、かわりに募金をすることにしました。毎年募金の知らせが届いていたのですが、二〇二〇年からその知らせが届かなくなりました。イエス様が、「もういいよ」とおっしゃってくださったのかな？」と思っています。

人にイエス様を紹介できるような者とは程遠いです。それでも、赦されたからこそ、「私のような者でも救っていただいたことを証しなさい」と言われているのだと思います。

職場でも、患者さんとの関わりが長くなってくる中で、イエス様はあることに気づかせてくださいました。それは、患者さんのことを「この人はこういう人なのだ」と勝手に決めつけて、上から目線で見てしまう傲慢さと不信仰です。「なぜ祈らないのですか？」「信じないのですか」とイエスさまが仰っていると思いました。自分で人を評価するのではなく、そのままイエス様の前に打ち明けて祈ることが必要だと感じています。

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。

（ヨハネ　9・1～3）

二〇二一年、新型コロナウイルスの影響で、集会で集まることが閉ざされた間、ＺＯＯＭで参加した富山キャンプをきっかけに、吉祥寺集会のお祈り会と町田の学びに導かれました。今までお会いすることのなかった集会の皆さんと定期的に顔を合わせて、お祈りの課題を出し合い、共に祈る恵みをいただいています。

二〇二二年五月に母が骨折し入院しました。それを機に、父、祖母、叔母と私の四人での生活が始まりました。二週間後、父と喧嘩をしてしまいました。イエス様に「どうしたらよいでしょうか。できません」と叫んでいました。それから、祖母の入院、叔母の通院、父の皮膚病の手当や家事の分担等、話し合うことが多くなり、誰一人、欠けてはならないと思うようになりました。私たち家族が一つにされるための大切な機会を備えてくださったのだと思います。後で、父が集会の方によく電話してお交わりをして頂いていたことがわかり、

6人の証し

父をないがしろにしていたことを示されました。母は順調に回復し、退院することができました。集会の皆さんの祈りやみことばのお便り、お交わりを通して支えてくださるイエス様に感謝しています。

同年十月、祖母の介護が始まりました。祖母は、幼少期にとても可愛がられたことを話してくれます。愛された経験は、その人にとって大きな財産なのだと感じます。まして、イエス様から私たちは、どんなに愛されてきたかを知ることができたら、はるかに素晴らしい恵みに気づかされることでしょう。祖母と賛美したり、聖書を読んだりする時間が多くなり、周りの人の救いを共に祈るようになりました。以前は「祈っても何も変わらん」と言っていた祖母が、今は自分から祈り始めます。祖母が詩篇23篇を暗唱する姿を見て、訪問の看護師さんが、「救われます」と言われ、自身も家族の介護をしていることを話してくださるようになりました。

二〇二三年四月、祖母が転倒して動けなくなった時、「イエス様、何もよかこつはなかばってん、感謝します」と祈りました。もう、今度入院したら退院できないかもしれないという時に、このような言葉を聞くことができて、感謝しました。父は体中の皮膚炎が悪化し、なかなか原因がわからないでいました。激しいかゆみと痛みで睡眠がとれない中、「聖書がよく読めるよ」と言います。次々に家族に病が与えられ、通院するのも祈りが必要です。

自由な時間は減りましたが、イエス様に助けていただきながら、家族で笑いながら過ごしています。ただ、私自身は、相変わらず自己中心で愛のない者、人をさばく者です。いつも、後でイエス様と家族に謝っている状態です。イエス様の来られる日が近い今、現在は離れてしまっている弟とその家族、同居している叔母、イエス様を知らないでいるすべての方々が救われてほしいと願っています。道半ばの歩みですが、イエス様

ご自身が生きておられ、ご計画を成し遂げてくださいますから、感謝です。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。主よ。あなたの恵みはとこしえにあります。あなたの御手のわざを捨てないでください。

（詩篇　138・8）

…神ご自身が彼らともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

（黙示録　21・3、4）

見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。

（マタイ　28・20）

古田 桐子（ふるた きりこ）
一九七一年熊本市生まれ、熊本市在住
都留文科大学卒業、中島学園卒業、
熊本リハビリテーション学院卒業、城ケ崎病院勤務

父　俊秋（としあき）、母　静子（しずこ）
祖母　鶴子（つるこ）、叔母　康子（やすこ）
弟　哲朗（てつろう）、義妹　三恵（みえ）、
甥　結唯（ゆい）

今の時の苦しみ

ゴットホルド・ベック

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖(あがな)われることを待ち望んでいます。

（ローマ　8・18〜23）

ここに示されているみことばは、非常に現実的な問題です。文中に、「いろいろの苦しみ」、「虚無」、「滅びの束縛」、「生みの苦しみ」、「うめき」とありますが、それらは、私たちにとって身近な問題です。現代は、苦悩、不安、混乱、失望、暴力、破壊、無秩序、放縦の時代です。人々は、この世のことだけに熱中しています。主なる神と、神のことばである聖書については、まったく無関心です。

しかし主によって救われた人々、聖書を知っている私たちにとっては、これらの風潮は、別に驚くようなことではありません。なぜならすでに聖書が、それら

を正確に預言しているからです。

では、みことばにある「今の時のいろいろの苦しみ」に対して、私たちはどのような態度をとるべきでしょうか。まず、三つのことについてご一緒に考えてみたいと思います。

第一に、主イエス様を知るようになった者は、何をいただいているのでしょうか。第二に、イエス様を知るようになった者は、何を約束されているのでしょうか。第三に、イエス様を知るようになった者は、何を期待しているのでしょうか。順に考えてみましょう。

1．主イエス様を知るようになった者は、何をいただいているのか

冒頭に引用したローマ人への手紙8章23節には、イエス様を知るようになった者は、「御霊の初穂をいただいている」と書いてあります。私たちは御霊を持つことによって、救われ、神の子どもとなったのです。次の聖書箇所を見ましょう。

もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

（ローマ　8・9）

あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。

（1コリント　3・16）

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（1コリント　6・19、20）

「主イエス様を知るようになる」とは一体どういうことでしょうか。洗礼を受けていること、教会に属していること、聖書の知識をたくさん持っていることなどが決定的に大事なのではありません。「主イエス様との出会いによる救いの体験」こそ大切です。イエス様と出会った人とは、イエス様を知っている人です。そして、イエス様を知っているということは、「永遠のいのち」を持っているということです。

主なる神の御霊を持っている人は「神の子ども」です。御霊によって、人はイエス様のからだである教会、つまり神の大きな家族の一員となります。それは、自分自身の努力によってそうなるのではなく、神の御霊の創造的な働きによって「神の家族」とされるのです。

御霊がその人を支配すると、すべてが新しくなります。つまり、その人は、自分の過去、現在、将来に対して、まったく違った見方、生き方をするように変えられます。

イエス様の十字架のみわざによって、人間の罪は、完全に消し去られました。ですから、自分の「過去」は、自分にとってもはや重荷ではなくなります。なぜなら、イエス様の十字架の血潮によって、私たちは贖われたからです。

また、主イエス様との出会いによって、「現在」に対しても、人は全く新しい関係を持つようになります。よみがえられた主は、信者一人一人を導いてくださるので、私たちは安心してすべてをゆだねることができます。それは不安からの解放を意味します。

また、御霊が私たちの内に宿ってくださることによって、「将来」に対しても、まったく新しい関係を持つようになります。将来は不確実なものではなく、イエス様が約束通り再び来られて、新しい神の国が実現することを確信するようになります。

以上述べたことは、御霊を通して私たちに与えられます。そしてこれらは限りなく大きな宝です。しかし聖書は、これらのことはまだ「初穂」に過ぎない、と言っています。「初穂」だと言うことは、後に「もっと大きな収穫」があることを意味します。最も大切なことはこれから起こります。それは、「復活」によって私たちが新しいからだをいただくことと、主の再臨によって世界がまったく新しくなることです。

私たちがいただいた新しいいのちは、現代の不信仰な世とは、まったく相容れません。

御霊と聖書によって、私たちは将来のことを知っているので、喜ぶことができます。現代の多くの人々は、この世のことに熱中し、自分自身のことばかり考え、追求していますが、その結果は不幸と不満、そして滅びでしかありません。

これに対して、イエス様を知り、イエス様に頼る者は、自分たちの罪が赦され、主なる神との平和を持ち、永遠のいのちをいただいているから、いつも喜んでいます。イエス様を知っている人々は、真の意味で富んでいる人々です。彼らが持っているのは「永遠」であり、決して消え去ることのないものです。

2. 主イエス様を知るようになった者は、何を約束されているのか

今の時の苦しみ

冒頭の聖句で、パウロは言葉を飾らずに真理を語っています。それは、救われた信者といえどもうめき苦しむ者であり、待ち望む者である、ということです。すべての被造物とともに、私たちもまた虚無に服している、とあります。美しい花もしぼみ、麗しい日々も過ぎ去り、人間は年老いて死んでいきます。それが22、23節にある「うめき」です。パウロは、今のこの状態を、「被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに生みの苦しみをしている」と記しています。イエス様を知らない人々は、自分はこういう状態にない、と錯覚しているか、またはこの問題について、あえて考えようとしません。しかし遅かれ早かれ、「イエス様なしでは、ほんとうの満足と平安は得られない」ということを認めざる

をえなくなるのです。

現代は、いたるところで「約束」が次々となされています。しかし、それらの「約束」が実際に果たされることはごくまれです。現代の特徴は、無責任、変遷、無常、そして死、滅びです。その原因は、人の心が神から離れていることであり、神を知らず、認めようとしないことです。たとえ才能、健康、富、美貌、権力などに恵まれたこの世の成功者であっても、実はその心の内は孤独であり、空虚であり、満たされてはいないのが実情です。

歴史を見ると、人間はいろいろな理想を求め、追求してきたことがわかります。ギリシャ人の理想は、高貴な性質と美しい肉体を持った人間でした。しかし、この理想は、今日に至ってもなお達成できない幻想です。マルクスによる共産主義体制の理想も、階級のない平等な社会の実現という理想も、今日まで実現されたことはありません。また、現代のヒューマニズム、人道主義は、完全な福祉国家を目標とし、戦争、悲劇、飢え、破滅のない平和で安全な社会を作ろうとしていますが、この目的も実現されえないのは、現実をみれば明らかです。

第一世界大戦で壊滅したドイツにおいて、アドルフ・ヒトラーは、自分に従えば、「ドイツ国民は一人残らず自分の家と車を持つようになり、夢のような生活をすることができる」と約束し、しかもそのような状態が「一千年続く」と公約しました。国民から支持を得たヒトラーは、総統となり十三年間ドイツを支配しましたが、その公約を果たすどころか、無謀な戦争の末に、敗北して敵に包囲され廃墟となったベルリンで自殺してしまったのです。

なぜ、これらの人間が描いた理想が実現しないで終わったのでしょうか。どうして幻想に過ぎなかったのでしょうか。

有名な科学者のアインシュタインは、「世界の唯一の問題は人間の心の問題だ」と言いました。多くの「理想」は、人を取り巻く「環境」を変えることを目標にしていますが、そこに住む人間の「心」が変わらなければ、「環境」はいくら改善されても何の価値も持ちません。

現代はまた、「技術」の時代です。人間は新しい技術を開発し、驚くべきものを次々に作り出していますが、人間そのものは途方に暮れているといえましょう。その不安の原因は、突き詰めれば一つの問題、虚しさ、虚無が解決されていないことにあります。

仏教徒は、「無常」、つまりすべては虚しく、過ぎ去ってゆくものだと、諦めることを良しとします。しかし、イエス様を信じる私たちは、救いの確信を持っています。私たちが待ち望んでいるのは、無や滅びに至る死ではなく、主なる神の子どもとして、主とともに永遠のいのちに生きる幸せです。

今の時の苦しみ

3. 主イエス様を知るようになった者は、何を期待しているのか

最初に引用したローマ人への手紙8章の18節と21節に「栄光」とあります。「栄光」とは、たとえば死、罪、負い目、憎悪、欠乏、苦悩、悲哀など、人間の苦しみの源となるものがまったく存在しない状態だと言えましょう。黙示録21、22章を読めば、栄光とは何であるかをはっきりと知ることができます。主なる神は、イエス様を遣わすことによって、永遠に救われる道を開いてくださいました。十字架の上で主イエスは全人類のための救いのみわざを完成されたのです。

また、イエス様のよみがえりは、「死は終わりではない」ということの証明です。主を信じる神の子どもたちは、イエス様の力を体験しており、永遠のいのちに生き、イエス様の再臨によって主の大いなる栄光が明

らかにされるという事実を確信しています。
次のみことばは、私たちが被造物と一体であることを示しています。

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。…被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。（ローマ　8・19、21）

このように私たち人類だけが苦しんでいるのではなく、それ以外の被造物全体も苦しんでいるのです。私たちは被造物の苦しみの一つを、激しい生存競争の中に見ることができます。

人間の罪のために、被造物もまた、死と苦しみに服するようになったのです。しかしそれは永遠にというわけではありません。もしそうなら、それはあまりにひどい絶望の状態だからです。
私たちイエス様を知る者は、私たちのからだの救いを待ち望んでいるだけでなく、全被造物が滅びの束縛から解放されることをも望んでいるのです。
私たちには、筆舌に尽くしがたい栄光が待っています。戦争で捕虜となった人々は、いつの日か故郷の家族と再会できることを期待して、苦しい重労働と欠乏に耐えました。これと同じように、イエス様を知るようになった者は、来るべき栄光を望み見ることによって、今の時のあらゆる苦しみに耐える力を与えられるのです。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

パウロは、今の時の苦しみと、やがて信者たちに現わされる栄光とを比較して、今の苦しみなどは取るに足りない、と考えました。

彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。（2コリント　11・23〜28）

パウロは、自分が体験した苦難をこのように書いていますが、それらの苦難でさえ、いつまでも続くものではなく、「取るに足りない」と考えました。やがて私たち信者に現わされる栄光は、他の何ものとも比べものにならないくらい大きく、すばらしく、しかも永遠のものである、と言っているのです。

イエス様を知るようになった人々は、この世が人間の努力によって、完全なものになる、という幻想から完全に解放されています。人類がこの世を改善しようとするあらゆる試みの結果はどうなるのでしょうか。それは、混乱と退廃に満ちた現代の状態を見れば明らかです。

ただイエス様の再臨だけが、これらの状態を根本的に一新することができます。イエス様が再び来られるとき、主の栄光が明らかにされ、すべてのものは造り変えられ、被造物は主なる神の子どもとしての栄光にあずかるものになるのです。

今の時の苦しみ

イエス様を知っている人々は、喜びをもって生き、苦しみ、そして死ぬことができます。なぜなら、死や滅びから解放され、主イエス・キリストの栄光がすべてのものに満ちあふれる未来を確信し、主イエス様とともに永遠に生きる喜びを持っているからです。

ヨハン・セバスチャン・バッハは、晩年には目が見えなくなっていましたが、死の直前に、突然目が見えるようになりました。彼の妻はバラをとり、彼の目の前に置いて、「見えますか?」と尋ねました。するとバッハは、「見える」と言い、続いて、「私とお前がもうじき見ることになるバラに比べれば、このバラの色などとるに足りない。私とお前がもうじき聞くであろう音楽に比べれば、この世の音楽などとるに足りない。私は、この目で私の主イエスご自身を見るのだ」と、確信に満ちて答えました。これこそ、生き生きとした望みに満ち、信仰の確信に満ちた告白です。

『すぐに起こるはずのこと』第4巻「あとがき」より





キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

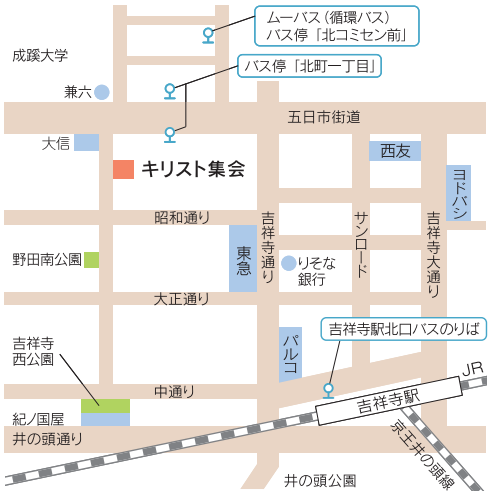
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

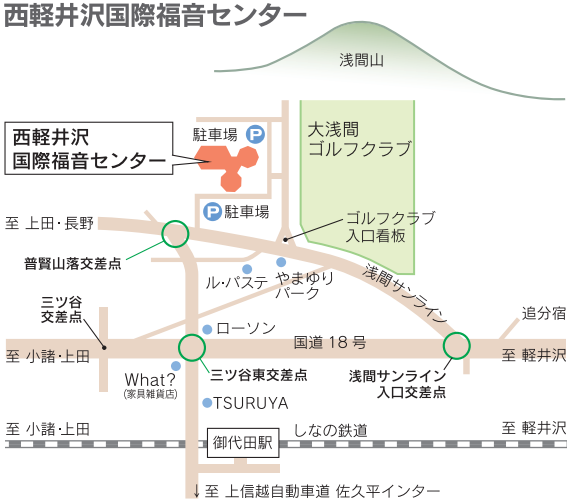
［電話］0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会	10:30 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



西軽井沢国際福音センター



アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分（1000 円程度）
徒歩 約45分＝３Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分（約7km）

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

西軽井沢国際福音センター
［電話］ 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］ 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第63号

定価100円（税込み）2024年3月10日発行

編集スタッフ	岩本秀造　黒澤錬二　鈴木力
	芳我幸雄　福留伸子　牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守恪太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ　http://christ-shukai.net/
出版本を購入されたい方、お問い合わせ　webmaster@christ-shukai.net
また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。